

はくのんの受難

片仮名

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

CCCを駆け抜けたはくのんがFGOにログインしただけの話。

結果的に、いつも通りに自分を知らず、裏にだれかがいるのは当たり前、呪われてる
のかなつてくらいに災難が降りかかる。

そんなはくのんの受難の日々。

——癒しはやっぱり後輩だった。あと眼鏡。

短編になつてたので移動。

目

次

プロローグ

プロローグ

一話

二話

三話

四話

五話

六話

特異点F
炎上汚染都市

冬木

九話

八話

七話

145 124 112

93 77 64 51 34 19 1

十一話
十二話

十話

185 172 160

プロローグ

どうしてこうなった。

自覚してしまえばぶつちやけいつものことではあるけど、いい加減にしてほしい。

長い間眠っていたような倦怠感がさらに気分を落としていく。

……気分を落としていく、というか意識が完全に飛びそうです。

——どうして目が覚めた瞬間、制服一式で雪原に放り込まれなければいけないのか。

寒い、というか痛い。

幸いなのは旧女子制服ではないため、生足は避けられたことか。

だからといってこの状況を乗り切れるなんてことはしないのだが。

——おまけにいつも通り、記憶があいまいである。

もう何回目だろうか、こんな状況に陥るのは。

悲しいことに慣れてしまったのか、いつもにまして驚きが少ない。

まあ大雑把ながらに月の聖杯戦争の記憶が残っているのも一因だろう。

自分が何者なのか、岸波白野という自分の名がわかつてているのだから。
それだけ分かれば今は上出来である。

——そんなことより、現状を打破せねば！

死ぬ、本当に死んじやう。

ほら見たことか、走馬燈が見えてきてしまった。

紅い弓兵、赤い皇帝、青い妖狐、そして眩い黄金の王。

温かいなにかが懐かしいと胸の中を這いずり回る。

同時にその思い出の中で死にかけた回数を自然とカウントし……両手の数を超えた
あたりで目をそらした。これはダメだ、今の状況がまだ生ぬるいと思ってしまうとか私
の人生は波乱万丈すぎる。

と、いうか。

聖杯戦争はマスターとサーヴァントの二人組での戦い。
その記憶が複数あるというのは一体どういうことなのか。

——いや、考えるのは後回しだ。寒い、本当に寒い。

ありすと闘つた氷の城より寒い！

まさか幾多の死線を越え聖杯を手に入れた私が、こんな死にかたをしようとは。
最強なのは人ではなく自然だった、まる。

——ああ、今なら全部食べれる気がする……殺人、まー……ぼ……
もしくは、エリザベートの料理（温かいスープ限定）

それを思い浮かべたが最後、私の意識は薄れていった。

何故か最後に、いたずら好きそうなカラフルな男の人を幻視して。

「キヤウ！」

「ま、待つてくださいフォオさん！　勝手に施設の外に出てしまふなんて、バレたら所長に怒られてしまいます！　ああもう、雪を掘り返して……遊びたかったのならば施設の敷地内でも……」

「キヤウキヤウ！　キュー！」

「ここを掘れと？　……仕方ないですね。こんなこともあろうかと持ち運び用小型スコップが——何でしようか、今突き刺した部分が柔らかかつたような……」

「キュー！」

「ひ、人が埋まつて!? いいいい急いでカルデアへ運ばないと——」

ああ、生きているつて素晴らしい。

正確には室温が氷点下よりも温かいことが素晴らしい。

「いやあ、流石に手遅れかと思ったんだけど半端じやないね、ギイ、と椅子を回しながら笑顔を浮かべる男性。君の生命力は

どうやら凍死寸前で拾われた私を救つてくれた恩人の一人らしい。

「あんな寒いところで雪に埋もれて生きてるだなんて……もしかして似たような経験があつて耐性ができるとか」

……言われてみるとあなたがち否定できないようだ。

何せ、今の体かどうかは分からぬが冷凍保存されていたこともあるのだ。
そのせいかと言われば否定できないような……いや、それで耐性出来るつて適応力

おかしい。

まあ何にせよ生きているのだから過程は気にしないことにしよう。

「おまけに死にかけたというのに、精神のバイタルは正常値つて……流石に驚いたなあ」

あはははと笑う男性はロマニ・アーキマンというらしい。

私が運び込まれたこの場所、カルデアという組織で医療をつかさどる人間のひとりだ
という。

「つと、マシユに君が起きたら教えてほしいって言られてたんだつけ」

そういうながらドクターは端末を手に取る。

それにしてマシユ?とはいつたい誰のことなのか

「ん、ああ。君を雪原から掘り起こした子だよ。随分と心配しててね。」

成程、私を掘り起こして……。

これはお礼を言わなければいけない。

「うん、そうしてあげて。つと、やあマシユ、君が連れてきたお嬢さんだけど目が覚めたよ。うん、バイタルもすべて安定していて医師である僕からみても驚きだよ——つてありや、切れた。ままもなく到着するだろう」

と、そういうれば現状の確認ですっかりと忘れていた。

「うん? どうかしたのかい?」

——助けてくれてありがとう。

「——あはは、そう真っすぐに言われると照れるなあ。うん、君はいい子だ、間違いない」

うんうんとうなずくドクター。

そんな様子を見ていると、パシユとドアが開く音がした。

視線を向けてみれば、そこには眼鏡をかけたパークーをまとう可愛らしい少女が立つていた。

……なぜだろう、彼女を見ているとやたら保護欲がわいてくる。

まるで『桜』のような——

「おはようございます、先輩。ご無事なようで何よりです」

後輩キヤラだと——！

それに加えて眼鏡だと——！

「ここは樂園だつたのか！」

「ひやう!? え、え?」

驚く少女を見て正氣を取り戻す。

ああ、すまないちよつと興奮してしまつた。

「いやあ、ちよつとじやすまなかつた氣がするけど……もしかして業が深いのかな」

後輩キヤラつて素晴らしい。

私は今まで生きてきてそれを学んだ。

そして今、その素晴らしさを再確認したのである。

「いやあ君とはい酒が飲めそุดなあ！」

「ダメです、ドクター。先輩はおそらく未成年、何より病み上がりですので体に毒です」

「あはは、冗談だよマシユ」

二人の会話を聞きながら、ジ、と少女を見つめる。

淡い桃色の髪に白い肌、儂そうなその容貌は『桜』を彷彿とさせる。

守りたい、その笑顔。

「うわお、男前だね。彼女に合わせたら気に入られちゃいそうだ」

彼女とは誰のことか。

まあ私の場合、気に入られた相手は相当に厄介というパターンが多いので会わないで

済むならそうしたいところ。

代表？ ヤンデレとか良妻賢母とか……あとアイドル？

「あの……熟考中に失礼します。先輩、体調の方はいかがですか？」

言われて、体を動かしてみる。

痛みも氣だるさもなく健康そのものである。

本当に死にかけたのか疑問に思えるほど。

これまた聖杯戦争ではいつものことなので動搖なんて今さらできない。

「良かった。フォウさんが見つけてくれなければ、先輩が地上に出てこれるのは数世紀も後だつたかもしません」

ぞつとしない話である。

30年先でも取り残された感があつたというのに数世紀とか考えるだけでも恐ろし

い。

本当に感謝してもしきれない。

「いえ、私はフォウさんに言われた通りにしただけですし……」

それでも救つて、ここに連れてきてくれたのは君だ。

それは間違いないことで、おかげで私が救われたのも間違いないことだ。

「そう、ストレートに言われてしまうと、照れてしまいますが」

頬が赤く染まるその表情、プライスレス。

……どうしたのだろう私は、後輩に飢えているのだろうか。
と、そういえばフオウさんとやらはどこにいるのだろうか。できることならフオウさんとやらにも一緒に感謝の言葉を伝えたいのだが。

「ああ、フオウさんなら先輩の布団の中に」

なんだと。

バツと布団をめくつてみれば、そこにはなんだかよく分からぬ生き物が身を丸めて寝ていた。

なに、このかわいい生き物。

狐とか目じやない。

ご主人様!? と抗議の声が聞こえたような気がするが気のせいだろう。

「経緯を説明するならば、フオウさんが散歩のすえついに施設外へ脱走。それを追つた私がフオウさんの言うとおりにその場所を掘つてみたら先輩発見、という流れになります」

つまりこのフオウさんとやらが脱走しなければ今もまだ雪の下だつたということか。
たらればの話は今はよそう、無事だつたことを喜ぼう。
何にせよ、私が助かつたのは二人のおかげということだ。

——だから、ありがとう。

「先輩は真っすぐすぎます。あつて間もない私でも、先輩が善性の存在であると確信で
きるほどに」

「フォウ！ フォーウ！」

いつの間にか目を覚ましていたフォウさん——フォウが私の上で飛び跳ねる。

重い、かと思ひきや自然と軽く、ちよつとした肩叩き程度の衝撃が体をくすぐる。
「こら、フォウさん！ 先輩は病み上がりなんですからダメですよ！」

「あはは、マシユは心配性だなあ。でもマシユがこうして面と向かつて先輩と呼ぶ子は
珍しい。何か思うところでもあつたのかい？」

「そうですね……しいて言うのなら、先輩を見ていると落ち着くというか、どこまでも人
間らしいというか……ああ、この人は人畜無害だと」

何だろう、人畜無害の下りをいつだつたか聞いたことがあるようだ。

別に馬鹿にされているわけでもないらしいのだが。

「あはははは！ マシユがそう評するなんて珍しい。カルデアは良くも悪くも癖が強い
人間が多いからね。逆にノーマルな人種というのは貴重だよ。それこそ隙を見せても
つかれることはないつていうのはね」

……ここは魔窟か何かなのか。

隙を見せたら突かれるつて、魔術師のようだ。

――予想はしていたけど、やつぱり君も魔術師なのか」

シン、と先ほどとはまるで空気が変わる。

ドクターが私を見る目に確信が浮かび、マシユはフォウを捕まえようと格闘している。

……ドクターに私もつきあつたほうがいいのだろうか。

「その目はやめて！ なんだよもう、せつかく真面目にしようと思つたのにさ！ まあマシユが安全と評した以上、魔術師としての危険性もないとは思つてたけど」

喜んでいいのか微妙なところである。

何にせよ、敵対の意志はないので穩便に事を済ませてほしい。

「つて、そういうばまだこの場所のことを話してなかつたね。カルデアのデータベースに君のデータが無かつたってことは、元々やつてくる予定の魔術師ではないつてことだろう。察するに君は、カルデアがどういう場所なのかを知らないと思うんだけど」正解である。

先ほどからちよくちよくと耳にする言葉——カルデア。

それがここだということは分かれど、その意味までは分からない。

「ではドクター。先輩はやはり外部からの……しかし、マスター候補ではないとすれば

なぜこんな雪山に?」

正直に言えば私もなんであんな所にいたのか分からぬ。

流石の私だつて、氷点下に繰り出すともなれば制服一式だけでなく厚着をしていた。

「そういう問題じゃないんだけどね……まあ君が状況を理解していないのはよく分かつた。先ずはここ、カルデアがどんな役割を持つていてから始めたほうがいいかな」

そこからは頭の中を整理するのでいっぱいいっぱいだつた。

まずいえることがあるとすれば、案の定ここは私の知っている月——ムーンセルではなかつた。

というかムーンセルが存在しているのかも分からぬ。

並行世界の一つ、以前誰からか聞いた可能性の話。

ここは、私が知っている世界とは異なる場所のようだつた。

人理継続保障機関「カルデア」により人類史は100年先までの安全を保証されていた世界。

その保証が覆り、何の脈絡もなく人類は2016年で滅び行く事が証明されてしまつ

た世界。

同時に西暦2004年日本のとある地方都市に今までになかった、「観測できない領域」が観測されたのだという。

話の中にシバだとかなんとかレンズとかでてきたけど取り合えずは割愛しておく。

――要するに、人類が滅ぶのが確定した世界。

世紀末である。

だからこそカルデアは原因を追究し、とある地方都市の「観測できない領域」が原因の一つだと仮定した。

そしてそれを取り除くために実験中であつた過去への時間旅行を決行しようと踏み切つた、と。

この計画の中核を担うのが、どうやら世界中から集められた稀有な資質を秘めた魔術師らしい。

……ちなみにこの世界、魔術は確かに存在しているらしく私の知っているコードキヤストとは別物であつた。

「さて、と。そろそろ考えはまとまつたかな？」確かに衝撃の大きい話だけど、間違いなく世界は終わりに向かっている

あ、別に世界が終わりに向かってるのは何時ものことだからあんまり気にならない。

「……なんか今すごいことを聞いた気がするけど、ねえマシユ」

「何故でしよう、先輩が言うと説得力があるような気がしてなりません」

それで、そんな大事な話を私にしてしまっても良かつたのだろうか。

「ぶつちやけ部外者だと思うのだ、私。」

「いやあ、このカルデアに足を踏み入れた時点でもう元の生活には戻れないからね。それとも記憶を消去して外に帰る？　ぶつちやけ今日の記憶どころか大雑把に消えちゃう可能性があるけど」

——お断りします。

「だよねー。まあ今回は人命救助というのもあつて例外でね。君には選択肢が用意されている」

参加するか、記憶を消すかの二択だろう。

それだつたら私は——

「ああ、時間はまだ残ってるからゆつくり考えてもの——」

——参加する。

「決断は早っ！」

「男前すぎる！」

「え、君、以前にそんな経験が？　って、現状がそうなのか。うーん、でもバイタルに異だつて記憶なくすのはもう御免だし。」

常はないしなあ……かといつて嘘をついている反応もない、か」
まあもう過ぎたこと。

今の私は、今日まで生きてきた中で手に入れた思い出で出来ているのだから。
忘れてしまった過去は惜しいとは思うが、悔やみはしない。

「……僕が女だつたら惚れちゃうんじやないかつてくらい男前だね。マシユが呆け
ちゃつてるよ」

「いえ、先輩のように前向きな方は初めて見たもので……」

それが私の取り柄である。

最弱であり、過去すらなかつた私の唯一の。

——で、参加するとしてこれから私はどうすればいいのだろう。

「ああ、それなんだけどね。君——つて、まだ名前を聞いてなかつたね。教えてくれ
ないかい？」

そういえばすっかり忘れていた気がする。

——私の名前はフランシスコ……ごほん、岸波白野。

「なんか偉人の名前が出てきたような気がしたけど……岸波白野ちゃんね、綺麗な名前
だ。それで岸波ちゃんなんだけど……うん、やつぱりか。カルデアのデータベースに名
前がないから、マスターの適合者ではないと思うんだけどその魔術回路の質は魅力的

だ。できれば色々と手伝つてもらいたいんだけど……」

魔術回路？

いや、でも、あれは電腦の話である。

ならば今この体にあるという魔術回路は一体？

「……名前は憶えている、そして魔術師は知つているけど魔術回路は知らない？ もしかして岸波ちゃん、魔術的な要素で記憶を消されたか改ざんされたか……時間があるときにもうちよつと詳しく検査してみようか」

たぶん無駄だとは思うが、よろしくすることにした。

そんなことよりも魔術回路である。

「魔術回路というのは、魔術を使うためには必須ともいえるものです。魔術を使用するための魔力を生み出す機関で、生命力を魔力に変換する為の「炉」であり、基盤となる術式に繋がる「路」でもあります。どうやら先輩はその魔術回路が通常よりも質がいいみたいですね」

——まさかここに来て、岸波白野のターンがきたか！

「とはいっても、上には上がいるものですが」

——岸波白野のターンしゆうりよーう！

「ああ、落ち込まないでください先輩。それでも先輩の回路の質だけは平均を上回つて

「いますから」

「そうそう。だからこそ君の力を借りたいんだ。戦闘訓練然り、メンタルケア然り、君は周りに良い影響を与えてくれそうだ」

「人間アロマセラピーのようなものでしようか」

一攫千金狙えるのではないだろうか。

そう、お金は大事である、チョー大事。

お金があればアイテムが買える、おいしいご飯が食べられる。

ああ、あの時回復アイテムが買っていればもう少し楽な戦いに、リターンクリスタルが買えていれば一瞬で帰れたのに！

すべては遠坂マネーイズパワーシステムとかとち狂った存在が悪い。
あと借金取りの太陽の騎士とその主。

「おーい、戻つてこーい！ 取り合えず君の遭遇は所長が決めるだろうけど、悪いようにはならないよ。優秀な人材には比較的寛容な人だからね、比較的」

果てしなく不安である。

とはいえた現状、頼れるのはここしかないのだから何が何でもここに置いてもらおう。
断固としてここを離れるわけにはいかないのである。主に屋根ある生活のために！

世界の滅亡は、まあ、ホント、いつもの事である。
なるようになる。

一話

「貴方が正体不明の厄介者？　まつたく、こんな忙しいときに。まあいいわ、貴方は魔術回路の質だけは優秀だから素性に問題が無ければここに置いてあげる。万が一の時に使えるよう、マスター候補が到着する前に貴方は戦闘訓練をしておきなさい。それと雑用ね。一応言つておくけど、変な真似をしたら即刻たき出すわ。あなた程度の魔術師、片手で仕留めることぐらい訳ないから気をつけなさい」

所長、オルガマリー・アニムスフイアはそういうながらため息をつく。
どうも彼女の生家であるアニムスフイア家は魔術の大門らしく、魔術回路の質と量ともに一流なのだと云う。

前所長、現所長の父が何らかの理由で没してから引き継ぎ今日まで所長として頑張つてきたりらしいのだが、残念なことに彼女にはマスター適性がなかつたらしく、時間旅行

——レイシフトが行えないことが分かったのだという。

結果、重責は重なるばかり。

何だろう、シンパシー感じちゃう。

「ええ……所長を前にそれで済むとか……君のメンタルやつぱりおかしいんじや……」

「ちょっと口マニ、失礼じやない!? というかこんなところで油を売つてないでさつさと自分の仕事に戻りなさい! それと素性を洗うのも忘れないようにつ!」

「や、やだなあ僕は岸波ちゃんを案内してただけさ! もちろんこの後しつかりと仕事に戻るつもりだつたさ! さ、行こうか岸波ちゃん!」

焦つたように私の背を押すドクターに抵抗する間もなく、中央指令室から飛び出した。

それにしてもあの所長、ちょっと凛に似てるような気がした。ツンデレか。

「さて、予想通り許可はもらえたわけだし先ずは部屋に案内するよ」

ありがたい。

ありがたいのだがドクターは仕事をしなくてもいいのだろうか。

「平気平気、たまには息抜きも大切さ! ほら、先にマシユが部屋を整えておいてくれてるはずだから急ごう!」

ほう、マイルームをですか。

まともなマイルームといえば月の裏側、赤い皇帝の部屋くらいしかまともなところがつたけど今回はどうだろうか。

「あ、おかえりなさい、先輩」

——うん、ただいまマシユ。

「な、何でしようか、今なぜかときめいてしまったような……」

「僕も。旦那の貫禄というかなんというか……」

ああ、ここが今日から私の部屋になるのか。

マシユが整えてくれた内装は際立つものこそないが、機能的である。

私の手が届きやすいようにと配置に心遣いを感じ取れる……！

「ま、まさかそこまで理解してもらえるとは。う、嬉しい反面、恥ずかしいです」

「後輩キラー……」

ドクターが何かつぶやいていたが、はて。

と、ここでのんびりしているわけにもいかない。

取り合えず最低限のことは終わらせておきたい。

「ああ、戦闘訓練の話だね。とはいえる岸波ちゃんも今日は疲れてるだろうし翌日からでいいだろう。所長は雑用つて言つたけど、とりあえず僕の手伝いをしてもらえると助かるかな」

ドクターの手伝い？

私には医療の知識はないし、できることは限られると思うのだが。

「ここ」でそう大怪我をする人はいないからね。主に心労からくる精神的なものが多い。とはいえる僕一人で話を聞くこともできないから、岸波ちゃんにもお願ひしたいんだ。ほら、人に話すだけでも心は軽くなるつていうだろ？ ここはカルデアだから、外にストレスを発散しにいくなんてこともできないからね」

成程、そういうことか。

そういうことなら引き受けたい。まあ私の場合聞くというより問い合わせて暴くタイプなのだが。

「さてと、マシューもご苦労様。後は僕が説明しておくから部屋に戻つても大丈夫だよ？」
「いえ、ドクターだけでは不安なので先輩さえ良ければ私も同席を。後、フオウさんも」
「フオウ！」

「あれ、今何気に僕ディスられた？」

いつの間にか現れたフオウがステップを踏む。

愛嬌があつて可愛らしいのだが……なんて生き物なのだろうか。

マシュー曰くリスのような何か。特権生物らしいのだが。

まあこの世の中ネコの形をしたナマモノとかもいるらしいし、今さらか。

「ま、まあ今は気にしない方向でいこう。それよりも岸波ちゃんの話だ。岸波ちゃん、戦闘訓練を受けることになつたけど魔術は使える?」

魔術が使えるかどうか、か。

正直なところ使えるかどうかはわからない。

そもそも私が使えたのは礼装に記録されていたコードキヤストだけで、私固有のコードキヤストなんて使えなかつた。

おまけにコードキヤストが使えたのは月での話で、今私の手元には礼装の一つもない。

——無理じゃね?

「取りあえずは今日は検査だけしておこう。魔術回路の本数は分かつたけど、その他がどうなつているかまでは検査してなかつたからね。もしかしたら岸波ちゃんの記憶喪失の原因がつかめるかもしれないし」

ごめんなさい、記憶喪失じゃないです。

いやまあ曖昧なところはあるのだけども。

記憶喪失というのは並行世界からきて常識が異なるが故の艇のいい言い訳でして。

ま、まあしようがないよね、うん。

「それじゃあ移動しようか。マシユ、ちょっと検査の手伝いをしてもらつてもいいかい

?

「はい、ドクター。それではフオウさんはお散歩に戻られてください」
「フオーウ！」

特権生物はとてとてと歩いて行つた。
さて、では自分たちも移動しよう。

……部屋の場所は忘れないよう番号を頭に刻んでから。

そうしてたどり着いたのはドクターが務める医務室。

中をのぞいてみたが職員はおらずドクターのみがこの部屋を使用しているようだつ
た。

「ああ、フロアごとに医務室があるんだ。ここは比較的人が少ないフロアだから僕一人

でも回していけるからね……つと。マシユ、岸波ちゃんに着替えと機材の装着を「了解しました。では先輩、こちらに」

マシユに案内され医務室の奥へ。

そこには簡易的なロッカールームがあり、ここで着替えろということなのだろう。いそいそと制服を脱ぎ着替えを済ませて外に出る。

「では先輩、次にこちらを」

何やらよく分からぬ機材を装着されていく。
なんだかこそばゆいが少しの我慢である。

そうして一式装着し終えて案内されたのはベッドの上。
あとは力を抜いて眠っていていいそうだ。
というわけで――おやすみなさい。

「確かに眠つてしまつてもいいとは言つたけど、こうもあつさり意識を手放すとは……
まあ疲れていたのかもね」

「どうか、死にかけた当日にその陰すら見せない先輩がタフすぎるのでは？」
「だよねえ……おまけに記憶が無いっていうんだから……まあその真偽は分からぬけどね」

そういうながらロマニは機材を操作する。

現在、ロマニが検査として集めていたのはCT画像に加えて魔術回路の本数とその質。

加えて何らかの魔術刻印を所持していないか。

魔術刻印は魔術師の家系が持つ遺産であり、生涯を以つて鍛え上げ固定化した神秘を礼装や神秘の欠片の一部などを核として刻印としたものだ。その効果は様々であり、術者をサポートする機能を持つものまで存在する。

その魔術師の家系における修練と研究の結晶、それが魔術刻印だ。

その刻印から魔術を読み解くことはできないが、それを持っているか持っていないかで異なることがある。

それは岸波白野が白か黒か。

「魔術刻印を持つているなら、何かしらの門派に属することになる。そこから生家にコンタクトを取るのも難しくはない。まあ、岸波ちゃんが何か大きな計画を抱えていて暗躍のためにここに来たって言われても信じられないけどね」

「先輩に暗躍は無理では？ 私なら先輩という人を知った上で、極秘裏にことを進める命令は絶対に出しません」

「まあ案の定行き倒れて、僕たちに保護されてるからね。となれば暗躍の可能性は低い。ただ所長は可能性をできる限り絞りたいみたいだから一応ね」

マシユはどこか不満げにベッドで眠る白野を見る。

ロマニは珍しいマシユの反応にいい変化だと思いながら、検査結果が表示されるモニターを見て、

「なんだ、これは」

マシユには聞こえない声で呟いた。

これはマシユに見せられるものではないと検査結果をバッグラウンドに隠し平静を装う。

「…………ドクター、検査の結果はどうなりましたか」

「うん、まあそれは本人がいる場——って言つても、刻印に関してはコツチの独断で本人の了承を得てないからなあ」

ロマニはそう説明しながら、どうしたものかと思考する。正直に言つてしまえば、検査結果は『異常あり』だつた。

ロマニにとつても衝撃的な話ではあったが、白野の記憶喪失にも納得がいく異常の一

つ。

「これは要相談かなあ…………」

いつの間にか眠っていたらしい。

マシユに体をゆすられて覚醒した私は、マシユに連れられて着替えを済ませた後ドクターの前へと連れ出された。

何故か張本人である私よりもマシユの方が検査結果を待ちきれない、そんな様子がおかしかった。

「コホン、それじゃあ検査結果を伝えるけど……うーん、どうしたものかなあ」

どこか、話すべきか迷っているドクターの様子にマシユが戸惑う。

これまた何故か私以上の反応である。すごい心配されていると思うと、この先輩思いの少女がとても愛おしく見える。

健気な後輩少女とか私にクリティカルヒットである。何にとは言わない。

——取りあえずなんでもいいので結果を

「本当に男前だよね、岸波ちゃん……これじやあ相談する意味もなかつたかなあ」
ドクターは目の前のモニターに一つの検査結果を表示する。

と同時にその隣には何らかの説明が書かれたもう一つの資料が提示された。

「岸波ちゃん、検査結果が出た。君の記憶喪失の謎が解けたよ」

そういうて検査結果を拡大する。

ああ、そういうことか、そういうことなのか。

——私は、アムネジア・シンドロームだつただつた。

「そう、君はアムネジア・シンドロームだつたんだ」

「……それは、以前蔓延したウイルスが原因の？ 確か症状は——記憶の、喪失」

「その通り。難病でかつては治療方法がなかつた。とは言え現在は治療法が確立され、以前と違つて完治可能な病気だ。当然のごとく岸波ちゃんも治療済みではあつた。ごく、最近の話だけね」

ふむ、ちょっと暗い顔をする一人をおいて整理しよう。

確かに本体であり冷凍保存されていた私はアムネジア・シンドロームにかかつっていたのは間違いない。

だがそれはコピーである私ではなく、本体のはずである。

そこから見いだせる結論は一つ。

——この体、本体のじやないか！

なんで、どうして！？

確かに本体にはもう記憶の欠片も残らずまっさらな状態だつたけどどうしてこうなつた！

「これは憶測だけど、岸波ちゃんは少し前の時代の人間なんだと思う。当時、治療法が確立されていなかつた難病にかかつた魔術師だつたんだ。そして徐々に記憶を失つていき、治療法が確立されない状況で追いつめられた。君自身か、それとも周りの判断からは分からぬいけど、治療法が確立されるまでコールドスリープでその時を待つことにしたつてところじやないかな」

「だから先輩の記憶はちぐはぐで……」

なんというご都合主義！

私にとつては非常に都合がいいので助かるのだけども！

というか優秀である、このドクター。大体あつてる、九割は当たつてる。

「ごめんね、岸波ちゃん。今の科学技術は進歩してるけど、失つた記憶までは取り戻せな

い」

申し訳なさそうなその表情に申し訳ない。

それ私じゃなくて本体の話なんだ。

いやまあ今となつては本体に私が入つてるんだけど。

「先輩……大丈夫ですか？」

「ぐはあ!?」

岸波白野に9999ダメージ。

違うんだ、心配されることは本当はないんだ。

純粹で健気な後輩をだましているというこの罪悪感が胸をえぐる！
サーヴァントの殺気に充てられるよりもキツイかもしれない……。

それでも、

——大丈夫だよ、マシユ。私も頑張つていくから。

「——先輩」

「うん、そうだね。よし、それじゃあこれから一緒に思い出を作つていこう！ 改めてよろしくね岸波ちゃん！」

「改めまして、マシユ・キリエライトです。よろしくお願ひします、先輩」

——改めて、岸波白野です……よろしくお願ひします！

いつか、本当のこと話をそ。

こんなにも私に親身に接してくれる彼らには、話さなければいけない。

そのためにもなぜ私がこうなっているのか、この状況の原因を探らなければ話すことができない。

並行世界、太陽系最古のアーティファクト、どれもそう簡単に信じることができる代物ではない。

ましてや、並行世界の壁を越えてきたなど怪しさ満点である。間違いなく私一人の力では不可能なのだから、その後ろには何かがいるはずなのだ。まあ、もしかすると？どこかのお狐さんがまたやらかしたとか？　世界最古のジャイアニストがまたやらかしたとか？　下手するとB.B.が事を起こしたとか？　可能性が否定できない人物わんさかである。

今、自分が語れる自分のことがあまりに少ない。

まるでかつての聖杯戦争である。

違うのは記憶は完全ではなく曖昧で、複数の記憶があることか。

しかし自分がことが分からぬといふ一点、これは何も変わらない。

——また、探すことになる。

どうして自分はこうも自分を知らないのか。

まあ私にできることなんて、諦めないことくらいなのだから今までと同じように手探

りで歩いていこう。

それが私が他人に誇れる数少ない一点なのだから。

だからその、しみじみとした表情をやめてください。

後ろめたくて堂々と外を歩けなくなりそうです……！

二話

さて、翌日である。

検査結果の後、私の事を考えてか一人で考える時間が必要だとその場で解散となつた。

当の本人である私にしてみれば、罪悪感に打ちふるえていたにすぎないのだが。

何にせよ解散、ならば部屋にと戻つて……ベッドに転がつてからの記憶が無い。

どうやら私は思つていたよりも疲れていたらしく、検査時に少し寝たにもかかわらずその後も爆睡してしまつたらしい。

私の意識が覚醒したのは、結局起きてこない私の様子を見に来たマシユに起こされてからである。

朝から後輩が覗き込むようにこちらを見ている光景には和まされた。

「あの、先輩……本当に一緒に戦闘訓練に付いていきたいのですが、少々、その……」
そういうつてマシユは廊下の向こうをチラリと見る。

方角的に中央指令室、ということは所長関連の話なのだろう。

これ以上時間を割いて所長にマシユが怒られるのはいたたまれない。

だから気にならないで行つてほしい。

「うう、ドクターに変なことをされたらすぐに言つてくださいね……それではまた、後程」

マシユはそういつて廊下の向こうへと姿を消した。

さて、それでは私も一度ドクターのところへ向かわなくては。

……それにしても、戦闘訓練とは物騒な話である。世界が終わりに向かつているのないことだからそれなりの脅威があるというのは分かるのだが、マスターでもない小娘まで戦力として當てにしなければいけない状況が起こりうるのか。

そんなことを考えながらドクターのラボへとたどり着く。

「ん、やあおはよう岸波ちゃん。うん、顔色は良さそうだね。昨日の今日だけど、所長から戦闘訓練のメニューが届いてね。まあさすがの所長も素人に無茶な訓練はさせないつてことで、最低限押さえておくべきとこを抜き出してくれたみたい」

何だろうか、これで所長に感謝の言葉を伝えたら

——べ、別に貴方のためじやないわよ！　使えるようにしておけば便利と思つたから、暇つぶし程度に考えただけ！

とかなんとかツンデレな言葉が返つてきそうである。

「所長と出会つて、そんな感想を持てる君は本当に稀有だと思うよ。しかもこれが案外いい線ついてるしね。と、まあ雑談はここまでにしておこう。予定時刻までに訓練のレポートを提出しないと怒られちゃうからね」

それは避けたいところである。

ならば早速その戦闘訓練とやらを始めるべきだろう。

「それじやあ場所を移動しようか。カルデア内にはアリーナがあつてね、そこを使うんだ」

アリーナか。

ぶつちやけ記憶の中にあるアリーナは碌な思い出がないのでちょっと……。

いつだつてあのアリーナは私たちの戦場であつた。まあここはムーンセルじやないし大丈夫だろうけど。

「ここ」がアリーナだ。更衣室はあつちだから、そこでこの制服に着替えて。カルデアが作つた戦闘服なんだ

このオレンジ色のぴちつとしたのが？

なんだろうか、かつて見た凛の相棒である青いランサーが一瞬脳裏をよぎつた。
いやいや、あれも立派な戦闘服だし、うん。青タイツじゃないし。

「着替え終わつたら更衣室の奥からアリーナに入れる。僕はモニタールームに行つてゐ
ね」

そういうつてドクターもまた別の部屋へと姿を消した。

取り残されるのも気まずいので私もさつさと更衣室の中に入り——かつてマイルー
ムで着替えた要領で高速着脱！

この間わずか五秒……！

以前よりも早く着替えができるようになつたかもしねれない。

場所は変わつてアリーナである。

何もない広い一室、本当にこの部屋には何もない。

ここで一体どうやつて戦闘訓練を受けければいいというのだろうか。

『モニター室から失礼するよ！ うん、やつぱり疑問に思うよね。でもこのアリーナ、何にもないけど中々凝つててね？』

マイクの向こうで機械の操作音が聞こえた。

するとそれに連動して何もなかつたアリーナの地下から何か人形のようなものがせりあがつてきた。

……なんだろか、あの人形。とつても嫌な予感がするの。

『じゃーん！ 戦闘訓練用に開発されたドールだよ！ このアリーナは表面上は何もない広い場所だけど様々なギミックがあつてね。地下にはこういつたドールが多く収納されているし、ホログラフによる魔術の訓練だつてできるんだ！』

やつぱりかー！

この人形と私が闘うことになるのか！ 一人で！

あの絶望的な光景を思い出さずにはいられない！

応えてくれた、赤い弓兵の背中。

応えてくれた、赤い暴君の声。

応えてくれた、青い妖狐の踊る尻尾。

ここに彼らはない。

……まあ流石にあの、サーヴァントでないと倒せないような戦闘力は誇らないだろ

う。

大丈夫大丈夫、きっと大丈夫。

『ちなみにそのドールは英靈——まあカルデアを説明したときに出でてきたかつての英雄のことだけど、彼らでもつてして余裕で倒せる。魔術師だつたら一流じゃないと倒すのに時間がかかるかなつてくらいには性能がいいものだよ』

——殺す気か、貴様。

『あつはは、大丈夫だよ。ギリギリは見極めるし、ギリギリを見極めるためにこのドールが選ばれたんだから。ちなみにマスター候補はこれらを一人で打倒するのが最終的な目標になる予定だよ』

マスターってバケモノの総称だつけか。

これを一人で打倒するとかありえない。

『勿論、魔術を使つてさ。このドール、戦闘能力があるとはいっても肉体的なものだから魔術は使えないんだ』

なるほど……で、ここに魔術も使えない人がいるのだが。

『当然、ドールの性能は制限するよ。命にかかるような危険はない、断言する。それに今日は岸波ちゃんがどれだけ動けるかの確認だから、無茶なことはしないよ』

この流れ、絶対に戦わないといけないやつだ。

ぶつちやけ私の素の戦闘能力なんて――――うん？ ちょっとくらいなら戦えるつ
ぽいぞ？

そういうえば私、生前のアーチャーに戦闘訓練を半年程マンツーマンでみつちり教えら
れてたつけ？

……今更だけど、本当になんのだろうかこの記憶の混雑は。私が契約したサーヴァ
ントは一騎なのに間違いはないのに、四騎の記憶がこの体の中にはある。そのどれもが
間違いなく本物であると自身が認識している。どれも私が経験した事実なのだと。

『それじやあドールを起動するよ。準備はいいね？』

つと、考へている場合じやなかつた。

取りあえず武器、武器を所望する！

『武器かい？ うーん、まあいいんだけど……使えるの？』
使える――はず！

あの記憶が本物であるならば、私はある程度双剣ならば扱えるはず。常に双剣を使用
した英雄の手ほどきを受けたのだから。彼は天才ではなく、己の修練での領域に至つ
た。そんな彼の手ほどきを彼の戦いをずっと後ろでみていた私が受けた。

結果とすれば、当然ながら彼の領域には至らなかつたが、まあ、うん、暴徒くらいな
ら相手できるかな。二人くらい。

『取りあえず、要望通りに双剣を用意したよ』

手に持つてみるが、なじまない。

そりやあ量産品だろうし、かつての双剣にくらべれば格が違うのだからしようがな
い。

兎に角準備は整った――！

『よし、それじやあドール起動！ 怪我をしないように気を付けてね！』

今日こそ人形を打ち倒す！

かつてのトラウマを克服する時である。

――かかつてこいや――！

十分後。

――無理だ――！

記憶はあれど、経験はあれど、体がついてくるはずがなかつた！

イメージは浮かんでくるのにその通りに体が動いてくれない。

ぶつちやけ反応が悪いのである。コントローラーの反応が悪くてコマンド入れてるとにキャラが動くのにラグがある感じ。

いやもうほんと、今の今までよく持つたものだと自分をほめてあげたいくらいである。

『……ちよつと驚いたな。まさか岸波ちゃんがここまで戦えるなんて。機能制限するつて言つたけど、様子を見ながらちよつとづつ制限解除してたんだけど』

聞き捨てならぬこと聞いた気がする。

弁明があるなら聞こうじゃないか。

『上司の命令』

……何にも言えない。

しいていうなら覚えてろよ所長。

『いや、僕も反対したんだけどこれがやつてみるといい線行つてね？』

じやあもういいだろう。

今日は様子見だつたというのだから、大体のデータはとれたのでは？

『あはは、そうだね。それじゃあ今日はここまでにしようか。そのうち岸波ちゃんも

ドールの制限無しに挑んでもらうことになるから頑張ってね』
ちなみにアレでどれくらい解除されているのでしょうか。

『半分くらいかな……うん』

半分で受け止め避けるで手いっぱいだったのにフルパワーとかないわー。
絶対に開始数秒で意識を刈り取られる自信がある。

『あ、あははは。でも大丈夫さ。岸波ちゃんもその時には魔術が使えるようになつてる
と思うよ』

だといいのだが。

……それで、もう十分だとのことなので終わりたいのだがどうすればいいのだろう
か。

『うん？ 普通にアリーナから出てくれて大丈夫だよ？ シャワールームは着替えた部
屋に併設されてるから自由に使ってね』

気遣いありがとう。

でもそうではないのだ、そうでは。

『あれ、まだ何かあつた？ ああ、着替えだね！ それじゃあマシユに頼んでおくよ』

ああ、うん、それも必要だつた。

でも——その前に、ドール止めてください。

『…………え、止まつてないの？』

止まつてないの。

というかなんかういんういん言つて、先ほど以上に元氣はつらつなの。

『いや、でも確かに僕ドールは停止させ——』

『——フォーウ！』

ああ、わかつた犯人分かつた！

もう犯人は分かつたから今すぐ止めてほしい！

『そ、それがコンソールが操作を受け付けなくて！　かといつて破損があるわけじゃ!?　つて、アリーナにロック!?　これじやあ出られないぞ?!』

死刑宣告ですか。

いやいやいや、どうしてこうなるの。

ドールはすごいやる気で、私はもうヘトヘトでろくにうごけはしない。たとえ動けたとしてもアリーナの入り口がロックされているらしいから、出ていくこともできはしない。うん、詰んだ、どうしようもなく詰んだ！

いつだつてこの世は理不尽ばかりである。

『岸波ちゃん、少しだけ頑張つて！　応援を要請したから！』

もうドクターの声を気にしている余裕はない。

振りかぶられたドールの拳が眼前に迫る。轟音、そしてその速度に怯え尻もちをつくことで偶然ながらに回避する。

しかしドールは手を緩めてくれるなんてことはなく、無機質な瞳が私をしつかりとどらえている。

——ああ、またこうなるのか。

私という人間の始まりは、間違いなくこうだつた。

ただの学生のように生活し、嘘で塗り固められたその生活を脱却し、死が付きまとう殺し合いの中に身を置いた。その始まりは間違いなくこうして、何の感情もないだろう人形との命のやり取りから始まつたのだ。

ここには何もありはしない、誰もいはしない。

——だからと言つて、諦める理由にはならないが。

こんなことで諦めていたなら、私はとうの昔にデータの海に溶けていた。

私が今もこうしていられるのは、諦めない自分と支えてくれた仲間がいてくれたからだ。

——なら、私がやることはいつも通りである。

前を覗ろ、決して折れるな、その過程はきっと報われる。

ここに彼らと縁を結ぶものはない。この場を乗り切るのは自分自身。

イメージするのは最強の自分。そんなことを言っていた赤い弓兵がいた。私が想像できる最強の自分は当然、トワイスクと戦った自分や魔性菩薩と戦った自分。言つてしまえばマスターとしてレベルを最大限まで上げた上に礼装全部回収して装備、焼きそばパンとプレミアロールケーキなどアイテムいっぱいの自分。

——この体には魔術回路がある。

真の魔術がどんなものかは未だよく把握してはいないが、コードキヤストに近いものだと思う。

確かコードキヤストと魔術は肉体に備わった魔術回路の使い方が違うだけだと誰かが言っていた。月で使用していたのはムーンセルのマナであったが、ここで使うのは自分自身の魔力だ。私は間違いなく、魔力の使い方は知っているはずなのである。問題があるとすれば、魔力は使っても魔術として行使できるかどうか。

何にせよ、回路を起こさなければ始まらない。

起動の合言葉は人それぞれだというが、私にはこれがふさわしい。

『スタート
再開』

体に眠る魔術回路が悲鳴を上げる。

長いこと使われていなかつたため錆びていたかの如く、回路の起動と共に痛みが走る。起動した魔術回路は魔力を生成し、閉じていた回路を強引に開き続ける。体の中を削られているような、何かを引き剥がされているかのような想像を絶する痛み。しかし、この程度の痛みでは私は気絶なんてできはしない。

痛みを感じながらも、体を走る回路を認識できる。

——同様に、この体に走る刻印が何かなんて知らない。

赤く、令呪のように刻まれた刻印たち。

一つだけではない、およそ40にも及ぶ刻印が体のあちこちに刻まれ熱を放つ。これがドクターの言つていた魔術刻印とやらなのかは知らないが、意識を向けてみれば嫌でもわかる。これが一体なんなのか、どう使うのか。

ああ、そうだ、これは間違いない。

『岸波ちゃん!? なんか全身真っ赤だけど！ つて、魔術回路が開いてるし、全身のそれって検査時に確認できた魔術刻印!?』

検査時に私の体の状態を知つていたドクターがどこかにいるらしい。

この件はあとできつちりと聞かせてもらうとしよう。

『しまつた、口が滑つた!! いや、こうなつた以上説明はさせてもらうけど、岸波ちゃん

にも説明を要求する!』

説明も何も、回路起動したらこうなつただけである。

実際のところ、この刻印たちがなんなのかを理解しているだけで、なぜこれらがここに、この体に宿っているのかはわからない。

コードキヤスト。

そう呼ばれ、礼装に登録されていた戦う術。

今思うと魔術刻印と呼ばれるソレと、魔術を記録する礼装はよく似通つていると分かる。

だからだろうか、礼装の能力が魔術刻印としてこの体に刻まれたのは、何にせよ、この場を切り抜ける力であることに変わりはない。

かつて使用していた礼装をリストアップし、このさび付いた回路でも使用できるランクのものを選び抜く。敵にダメージを与えるもの、自分自身を強化できるもの、条件を絞った中で見つかったのは序盤でお世話になつた礼装の一つ。

——コードキヤスト・守り刀『h a c k (16)』！

光る骨子でできた見せかけだけの刀。

しかし発動する魔術は敵に対して確実に効果を發揮する。

私のこぶしなどと比べるまでもない速度で放たれる魔力の塊が、様子を見るかのよう

に停止していたドールへ着弾する。

サーヴァントにもほんの僅かながらダメージを与えた魔術がドールの体を吹き飛ばした。

『まだだよ岸波ちゃん！ それじゃあドールは破壊できない！』

そんなことは分かつていて。

元々、敵工ネミーに当ても倒せる威力のものではなかつた。

今欲しかつたのは距離である。

——コードキヤスト・強化バイク『move | speed』！

刻印から魔術を引き出し、両の脚へと魔力の骨子がまとわりつく。

アリーナで、迷宮で非常によくお世話になつた非常に便利な礼装の効果は——移動速度の上昇！

ははははは、この速度についてこれるのならば追いかけてくるがいい！

『あれえ!? かつこよく覚醒とかそんなシーンじやなかつた！』

私は無双とか無理ゲー。

そもそも私の回路の量じや使用できる魔力量少ないし、一度に生産して使用できる魔

力もこのレベルが限界だし。

よつて私が選べる選択肢は結局一つ。

——早く早く応援早く！ 強化が続いているこのうちにー！
この後めちゃくちゃ鬼ごっこをした。

三話

更に翌日である。

あの激闘の末、応援がやつてきたのが三十分後。

流石に私の体力も限界だつたし、魔力も切れかけあれこれやばいんじゃないだろうか
と思った。

幸い駆け付けてくれたカルデアの職員が暴走ドールを瞬殺してくれたので大事には至らなかつたのだが、なんかこう、自分が必死に戦つてた相手をサクッとやられるところがある。いや、本当に感謝しているのだが。

何にせよ、私はあの試練を乗り越えたのである。

「それじやあ説明してくれるかな、岸波ちゃん」

そして次の試練がやつってきた。

私を取り囲むのは珍しく真面目な表情のドクターと、興味深げに視線を向けてくる所長。唯一マシユだけが心配そうに私を見つめていた。フオウくん？ 所長につまみだされたた。

「手荒な真似をするつもりはないし、君がアムネジア・シンドロームで記憶を失っているのも理解しているつもりだ。それでも、覚えていることを話してくれないかな」

実際、覚えているというか分かっていることは少ない。

これがかつてコードキヤストと呼ばれていたものであること、それが何らかの理由で刻印として私の体に刻まれていること。その効果は大体把握しているものの、私のさび付いた魔術回路では十全に扱うことができないということくらいだ。

「40 近い刻印なんて、頭がおかしいんじゃないの？ それだけの数の神秘を体に刻んで反動がないわけないじやない。貴方の記憶喪失、アムネジア・シンドロームだけが原因じやないのかもしれないわね」

「それに、コードキヤストか……データベースには載つてないなあ。秘匿された特殊な門派なのかな……うーん」

二人はそれぞれ考察するが、私からは何とも言えない。

本当に知らないのだから仕方がないのである。

「先輩、本当に体への異常はないんですか？」

「うん、それはない。

怖いほどに体になじんでいるし、どの刻印がどんな魔術を記録しているのかまで把握できる。

「それ本当？ ならいくつかどんな魔術なのか言つてみなさい？」

「ですが所長、魔術師にとつて魔術はそう簡単に開示できるものでは……」

「そんなこと言つてる状況じやないでしょ？ それに格下の魔術を嫌がらせで公開なんて真似しないわよ。一応、ロマンも個人的に記録しておくだけにしなさい」

「うわあ、所長が所長らしい」

「ロマン！」

「はい、分かりました！ 取り合えず岸波ちゃん、言える範囲でお願いできなかな」

それは構わないのちよつと待つてほしい。

基本的に私が使えるのは、

——回復系小・中・大、味方の攻撃力アップ、防御力アップ小・中・大、あとスタン付与と弱体化全解除と、

「ちょちょ、ちよつと待ちなさい！ 貴方、他人に対して強化が使えるの!?」

使えるのかといわれると微妙だが、そういう効果の魔術は確かに使える。

他にも私自身を強化するものもあるが、大体の魔術は能力を強化するタイプ。

「嘘でしょ、こんなのはほんとした草食動物みたいなのが他人の強化ができるとか……草食動物と言われてもくじけない。

そんなのはエリザベートに言われなれているのである。ギルガメッシュにはもはや

雑種扱いされていたのだから。

「岸波ちゃん、強化の魔術って生きているものには通りにくいんだ。かつ、それが他人ともなれば難易度は跳ね上がるんだ。強化魔術の最高難易度の技術なんだよ」
いや、でも、私の知り合いはみんなこうやつてサーヴァント強化してたようなどと思つたけど、聖杯戦争に参加してたマスターつてみんな一流のウイザードだつた。むしろ一族固有の魔術をコードキャストで再現した規格外もいたくらいである。その中で私は最弱だつたのだから、他のみんなはできて当然か。

そんなことを考えていると、所長がなにか思いついたらしい。

「もしかしたら貴方の門派、限界が来て いたのかかもしれないわね。魔術刻印は成長するけど、限界を迎えてしまえば後は衰退していくだけ。そこでアムネジア・シンドロームに浸食されて いた貴方に白羽の矢が立つたとか」

「……成程。既に限界が近かつた先輩なら、今さら負担がかかってもコールドスリープで眠るから問題はない。果てに衰退する魔術刻印を未来まで残すことで何らかの打開策を見出そうとした……それまで刻印をつなぐ金庫が先輩だつたのかもしれません」「魔術師らしいと言えば魔術師らしいね……でも岸波ちゃんを回収しようという動きはどこにもなかつたことからすると……」

「この子が眠つた後、協会の肅清にでもあつたのかもしねないわね」

「岸波ちゃん……」

「先輩……」

なんか勝手にバツクストーリー出来上がつてる——！

違う、きっとそれは違う！ どうせ私がこうなつてるのは聖杯のせいだつて！ 青い

狐かAUOのせいだつて！

「大丈夫だよ岸波ちゃん。君はもうカルデアの仲間だからね。ね、マシユ」

「はい。カルデアは私にとつて家のようなものです。同じ家に住む先輩は、その、家族の
ようなものですから」

——勘違い、されててもいいかな。

うん、マシユと家族になれるならそれでいいや。

きつといすれ、そのうち、真実がわかる時が来るだろう。

「……まあ別に私も追い出したりはしないわよ。どうやら後衛としてはソコソコ使える
みたいだし、バツクアップ要員として働いてもらいましょう。ロマン、彼女の訓練内容
を変更するから後で確認しておきなさい。勿論、貴方もよ」

何だろうか、心なしか所長からの視線が柔らかい。

でもしつかりと打算もいつぱい。

まあ利用価値がはつきりしていたほうが私としても安心なのでどんとこいである。

「ああ、それとカルデア内ではこれを着なさい。カルデアの制服よ」

そういって手渡されたのは白を基調とした制服である。

しかしこの制服、基調といいベルトといい少しだけ嫁王の事を思い出す。

「一応、マスターに支給する予定の魔術礼装よ。丁度いいからデータ取りも兼ねて使いなさい」

「あ、勿論あの戦闘服がいいっていうならそつちでもいいよ。耐久性なら戦闘服、礼装としての効果なら制服かな」

選択の余地はない。

当然ながらこちらの制服を使わせてもらうことにする。どうせ戦闘になつたら耐久力なんて紙も同然である。敵がどのレベルか分からぬが、サーヴァント級ならば何を装備していても攻撃を受けければ結末は変わらないし。

——ちなみに、サイズは。

「先輩の検査時に、ドクターがしつかりと」

オーケー、覚えた。

それと検査時に隠し事した件も思い出した。

「あ、岸波ちゃんの目が座つてる。……さつてと、僕は仕事に戻らないと！ マシユを部屋まで送り届けてあげてね！」

逃げた！

脱兎のごとく逃げた！

乙女の数字を暴くとは許しがたく！

……ちなみにマシユは、

「検査はドクターに一任されていますので……」

マシユのもか！

ましゅまろもか！

ちよつと本格的にお話がしたくなつてきた今日この頃。ここに女の医療関係者はいないとでもいうのか。

「取りあえず一度部屋に戻りましょう先輩。部屋に戻り次第、マッサージでもいかがですか？」

マッサージか、確かに体は疲れているからうれしい提案だ。

迷惑でなければお願ひしたい。

「はい、ありがとうございます。お任せください——東洋のツボは既にいくつか押さえてあります」

それは楽しみだ。

そういうえばこの施設、お風呂は存在するのだろうか。

「公用ですがこのフロアに用意されています。勿論男女別かつ、防衛機能は万全です」

防衛機能はよく分からぬが、お風呂があるのはうれしい誤算だ。

マッサージをしてもらった後でゆっくりと入らせてもらおう。よければマシユも一緒にどうだろうか。

「い、一緒にですか？……でも、いえ、良ければ、ご一緒させていただければと思います」

よし、そうと決まればまずは部屋に戻ろう。

東洋のツボを押さえたというマッサージ、楽しみである。

私はマシユと共に自分の部屋へと足を進めた。

その五分後、私の部屋からは私の絶叫が放たれることとなる。

「……申し訳ありません、先輩」

ちやふんとお湯に沈む音を立てて、マシユがつぶやく。

何に対しても謝っているのかといえば、間違いなく先ほどのマッサージの一件について

だろう。

正直に言おう——ヤバかつた。

気持ちよくてとか、体全体がほぐされてとかではなく、人体の急所を網羅した匠の技だつた。エネミーの攻撃やサーヴァントの攻撃で外傷を負うことはあつたし、毒を受けたり分解されそうになることもあつた。しかしあの痛みはそれらとはまた違うもの。

体の血行はよくなれど、精神的疲労が倍。ブツシユ。

——仕方がない。次がある。

「先輩……はい、頑張らせていただきます。復習と予習、加えてドクターを実験台として完璧を目指します。当面の目標は、先輩に気持ちよかつたと言つてもらうことですね」

頑張ります、とこぶしを握るマシユ。

元々色が白いまシユの頬はお湯の熱さからはほんのりと色づいていて、よく見れば肩なども同様だった。

色っぽい、艶やか、そしてそのポーズ。うん、可愛い。

というか、よく見てみるとマシユって、着やせするタイプのようである。

パークーと制服の上からでは分からなかつたが、無駄なところなどないようなスラリとした肢体に素晴らしいものをお持ちである。やっぱり『桜』と何かしらの共通点が見られるような気がしてならない。

後輩つてみんな天使なんだね。

「……あの……私の体に、興味深いところが？」

恥ずかしそうに体を沈めるマシユ。

どうやら視線が露骨すぎたらしい。同性といえど気を付けなくてはいけない。

——いや、ただ綺麗だなって思つただけだよ。

「……何でしようか、こういつた対応に慣れたこの感じ。記憶を失う前の先輩はもしかしてプレイボーイならぬ、プレイガールだったのでは……」

プレイボーイは鍊鉄の弓兵である。

あの女慣れしているような余裕の表情。

執事のごとく気遣いにもたけ、ホントにサーヴァントなのかと思うくらいだった。

そんなことを考えているとマシユは私の全体を確認するように視線を動かし、ほつと息をついた。

「それにしても、先輩に怪我がなくてよかつたです。戦闘訓練用のドールが暴走したと聞いた時には、血の気が引いた思いでした」

あれは当の本人である私の血の氣も引いた。

我ながら悪運が強いといふかなんというか、最終的に生き残れたのでまあ良し。

「ですが先輩、あの事故は最悪死につながるレベルの危険なものでした。訓練用といえ

ドリミッターが解除されてしまえば人間一人の命を奪うのもわけないものです。この施設は機密保持の観点から、多数の防衛機能が備わっています。あのドールも緊急時にはああやつてリミッターを外して外敵の迎撃にうつるものです」

……そんな物騒なものだつたのか、あれ。

確かに死にそうとか思つたけど、まさか外敵用にリミッターが外れている状態だと
は。要は寸止め機能が無くて敵の反応が消えるまで殴るのをやめない機械だつたわけ
だ。もしコードキヤスト——じやなかつた、魔術が使えなかつたらマウント取られてお
しまいだつた気がする。

「はい。ですので先輩が魔術を使用できたのは複雑ながらも喜ばしいことです。ただ、
魔術が使えると証明されてしまつたがために、バックアップ要員として起用されてし
まつたのが……」

心配してくれるのは嬉しいが、バックアップ要員だからそう危険はないはず。

あくまで私の役割はファーストオーダー発動時、この拠点に残つて支援の魔術を使用
するだけなのである。つまるところ直接戦闘に巻き込まれるわけじやないので危険性
は非常に低い。おまけに所長が訓練内容を変えると言つていたから、魔術の修練が増え
るのだろう。

「いいえ、先輩。たとえバックアップ要因とはいえ戦闘訓練は行います。むしろ先日の

先輩以上に戦闘訓練の割合は多くなるでしょう」

なんで!?

「バツクアッP要員はカルデアの主力が出払っている際、カルデアに残る二次戦力です。作戦中にどこかしら、何かしらの妨害工作が入った場合戦闘の主体となるのは先輩方になります」

と、いうかである。

やつぱりこのカルデアって狙われてたり?

「はい。カルデアは科学と魔術の入り乱れた特殊な団体です。古きを好む門派や一部の宗教団体から目をつけられています。その為このカルデアは人知れぬ山奥に存在しているんです。レイシフトを実現させる装置や魔術は精密なため、妨害工作が入らないように」

人類の危機に人類がいがみ合うとか、どこかで見た光景である。

あれは聖杯によって操作されていた事象であるから仕方がないと言えば仕方がないとは思うが。

それにもしても、そんな状況下にあるカルデアをまとめる所長のすごさを実感できた。前所長の後を継ぎ、適性がないと魔術師としてのプライドを嘲笑され、それでもなお

こうしてカルデアを存続させているのだから。

どうやら私が知り合う魔術師はみな優秀で、そしてどこか親しみやすい人ばかりのようだ。

「……その言葉、所長に直接言つてあげてください。本当に先輩は……もう」

マシユはそういうと、どこか嬉しそうに笑みを浮かべた。

四話

あれから数日、私に課せられた戦闘訓練は苛烈を極めた。

あの暴走した訓練用のドールと同型のものを相手に体術をメインとした訓練を行いボコボコにされ、終わつたと思ったら魔術で傷を治され体力の回復と共にもう一戦。その後は同じ型のドールを二体用意し、片方は私の味方という設定で支援魔術の重ね掛けと戦闘を行つた。

これを一日に三セットである……つらい。

特につらいのは体術の訓練だ。私の記憶にある通りの動きが実現できず、以前の自分ならできたなどと歯がゆい思いが胸を占める。やはり今の私の体は目覚めたばかりなのか全体的に能力が低下しているようだ。それはさび付いた魔術回路にも言えることである。

——また、最弱からやり直しか——！

なんという理不尽！

月で命を懸けて戦い続けた末に、マスター・レベルはMAXに身体だつて鍛えられていたというのに！

それが裏に落ちた途端にリセットとか、そして今回もとか悪意しか感じられない！

確かにこの体は現実のものであるから仕方がないと言えば仕方がないが、そう簡単に割り切れない。唯一の救いは今まで必死にかき集めた礼装が魔術刻印という形で残っていることくらいだろう。残念なことに、プレミアロールケーキはなかつた。あと桜弁当の空箱。

それともう一つ、引き継がれているものはあつた。

それは私が今まで生き抜いてきた末に手に入れた、戦いの経験である。相手は毎回のよう格上で、私たちは常に情報を集め使えるものを利用し仲間の協力を得て戦つてきた。その中で培ってきたこの『眼』だけは今もなお失われてはいなかつた。

そのおかげか魔術による支援は所長のお墨付きをもらえたのである。

『なに、なんなの、何も考えてない脳内お花畠みたいなほほんとしたこの子が、こうまで……突然変異かなにかなの？』

とお褒めの言葉をいただいた。

これにより次回からは後半は少し緩くなる予定である。

……前半はマシユと一緒に筋トレが追加されることとなつたが。

と、そういうえば最近になつてカルデア内にもう一人知り合いができた。名前はレフ・ライノールという男性でとても紳士的な人であつた。

——紳士的ではあつたが、見た目と態度の裏に何が隠れているのかはわからない。

かつての魔性菩薩のような最悪のパターンもあれば、レオのように本性さらけ出すとあれこれ誰だつけど知らない人、と早変わりするパターンもある。凛とラニの場合はちよつと特殊な性癖というかなんというかごによ。

兎に角、私は今まで人の裏に隠れたSGを暴いたりする過程で、その人の表面だけを見っていても分からぬことばかりだということを学んだ。

だからだろうか、敵意のない笑みの裏からこちらを見定めるガラスのような目を幻視したのは。

私は彼から差し出された手を取るのに、一瞬の間を空けてしまつたのである。慌てて手を取ればにこやかに笑つてくれはしたが、なぜだか腑に落ちなかつた。そこでドクターなどにレフという男性について聞き込みをしてみたが、どうやらドクターは彼と学友であるらしく信頼しているようだつた。

所長にも聞いたがのろけにも近い何かが延々と放たれ続けたので、偶然通りかかつた

ドクターに擦り付けておいた。

結論から言えば、私は魔性菩薩など的一件から少々人の本性に過敏になつていたのだろう。実を言えば刻印として刻まれる礼装の中に、純粹な礼装ではなく私が月で渡された万色悠滯という最悪のコードキャストも入つていて。これを使えばもしかしたら対象の本性を暴けるかもしれないが、万色悠滯の本来の使い方を知つてしまつた今では選択肢から除外するほかない。というか、桜たちのサポートなしで使えるものじやない。それにカルデアにあるシバという設備を作つたのはレフ教授であるというし、味方であるのは違ひないのだから。

というわけでこの話はここで終了である。

続けて私が気になつて調べていたことである。

それは勿論、この世界には月で出会つた友人たちが存在しているのかどうかである。

まず調べたのは当然ながら西暦である。当時の月は確か2030年代のことであり、私が罹患していたアムネジア・シンドロームのワクチンを発見したトワイイスが死んだのが1999年である。それを踏まえてマシユに聞いてみたところ、

『今は西暦2015年になります……先輩？ 頬色が優れないようですが……』

うん、過去だつた。

この世界と月での戦いがあつた世界が並行世界であることは理解しているものの、こ

れはちょっと厳しいんじゃないだろうか。確かにこの世界に遠坂凜は存在しているのだろうが、まだまだ子供で会話が成り立つ年齢ではないだろう。ラニに至つても同様である。

ちなみに西欧財閥はアトラス院と同様に存在しているらしい。

他にも『遠坂家』や『間桐家』といった魔術師の家系は存在しているようだ。もしかしたら桜の再現元である人物が実在しているかもしれない。非常に気になるのでよく調べてみようと思う。これでも電腦世界を駆け抜けたウイザードの端くれであるから、意外とハツキングなんてものもできてしまう事実が判明した一件である。確かに月の戦いで何度かハツキングモドキもしたけど、こうもうまいくとは。

岸波白野のターンが来たか。

……いや、フラグになるのでやめておこう。

そんなこんなで充実した生活を送り早数週間。

私は習慣となつた戦闘訓練を終え、余つた時間をドクターの手伝いに充てる日々である。

そんなドクターの仕事のお手伝いであるがその前に。

——このゆるふわ系、何気に医療部門のトップだつた！

ゆるふわで仕事をさぼってアイドルにはまるマダオ一步手前かと思つていただけに驚きである。

以前に訪れたドクターの仕事部屋に一人しかいなかつたのは、たいていの事なら一人でことがなせる程の腕を持っていたからなのだと。まあ最近はさぼりがよく見られるので監視役でも派遣しようかと思つたところに——私が来てしまつた。

つまり私の仕事はドクターの手伝い兼さぼらないように見張ること。

『あはは……ま、まあわざわざ僕のところまで診察に来る人は少ないし、デスクの仕事が多いんだ。だから息抜き程度にね？　いやあほら、どうせなら各フロアにあるラボに行つたほうが効率いいでしょ？　……え、それを考えたうえでここにラボを置いたのかつて？　——まっさか！』

とのことである。

実際にドクターの手伝いを始めた数日の間はデスクの仕事が大半で、報告書やらを医療部門のトップとしてまとめている場面が多かつた。その手伝いの一環で端末を借り受けることができたおかげで、『遠坂家』やら『間桐家』などの情報を集めることができ

たのである。

と、まあその一件は置いておいて。

前述のように、最初の数日間はそうして端末を使って資料を纏めるお手伝いが大半だった。

しかしそんな日々に変化が起これり始めたのが、たまたま疲れ果てげつそりとした一人の職員が運び込まれてきた一件があつてから。

疲れ果てたその職員の青年は、ブラックつてなんだつけとケタケタ笑いながらベッドにダイブして動かなくなつた。こつそりとベッドを除いてみればピクリとも動かない青年の姿が。いつたい何があつたのかとドクターに聞いてみれば、

『ああ、近いうちにマスター候補が到着するんだ。その際に使用する機器の設定に連日連夜と時間をかけてね。流石に限界だつたんじやないかな……』

そりやあこうなるよね、と乾いた笑みをドクターは浮かべていた。

ああ、これは近いうちにドクターも駆り出されるやつだと察しながらピクリとも動かない青年にこつそりと魔術を行使した。勿論コードキヤストは癒しの香木の cure である。さすがに魔術でスタミナは回復させられないでの、疲れをとるという意味でこちらにした。

それから数時間後、青年は目を覚ますとどこか驚いたようにこちらを見た。

どうやら彼には私の仕業だと分かつたらしく、流石はエリートと思いながらもどうしたものかと考え、

——内緒でお願いします。

ドクターにバレぬようジエスチャーで返した。

だつてこの魔術が効果的だつてわかつたら、絶対にドクターが目の色を変える。探求心がうずきだすか、より仕事が増えててんやわんやになるかのどれかだ。所長に漏れでもしたら人権何それおいしいのつてレベルで酷使されるに違いない。

へまして自分を追いつめない程度に、岸波白野は賢くなつたのである。

青年はジエスチャーを理解してくれたらしく、首をやたら激しく振りながら早足に去つていつた。その際にドクターがほほうと興味深そうに私を見ていてバレてしまつたのかと一瞬冷や汗をかいたが、いやあ青春だねえとかいいつつ自分の仕事に戻つていつた。

今までの一連の流れのどこに青春要素があつたのか。

ちなみに私の青春は間違いなく殺伐としていて選択肢を間違えると開始数分でバツドエンド確定のクソゲーである。もしくは相手方と仲良くなつてもヤンデレライバルに無残に惨殺されるか、私のストーカーに拉致監禁されるか。

そのすべてを乗り越えた先に私の幸せがある——と思つたら、一部のルートでは嫁が

分裂したりするのだ。

行きつく先は、先の見えないカオスである。

……他にも数パターンがあるがやめておこう。

話を戻す。

その数日後から、ラボに訪れる職員に変化があつた。

——なんか、数が増えてたのだ。

一人二人ならばまあ分からなくはない。

しかしそれが十や二十ならば話は別で、何かしら原因があるに違いないと私だつて理解する。しかし原因に予想がつかなかつた私はドクターと共に勤務時間終了後に原因の究明をしようと考へた。ドクターも同じだつたらしく快諾を得てラボに残り会議が始まつた。

そして、始まると同時にドクターが、

「さて岸波ちゃん。今日來た職員が結構いたけど……リピーターがいたことに気づいた

？」

「そういわれて、数日前にも来ただろう職員が中に混じっていたのを思い出す。うなずいた私を見てドクターはやつぱりかーと頬を描きながら笑っていた。

「今日来た職員に対して、岸波ちゃんがしてあげたことを思い返して『らんよ』

と言われて思い返すものの、私がやった事なんて魔術の一つも使わず話を聞いて相槌を打つて、素直な感想を返したに過ぎない。たまに意見を求められるから、私ならばこうするだろうということを伝えただけ。後はドクターにコーヒーを入れるタイミングでお客が来たからついでにもう一つ追加したくらいか。

「そう、それそれ。いやあ、岸波ちゃんって話を聞くのがうまいから、彼らも思いのたけを話せてしまうみたいだね。あのプライドの塊たちがポロポロと不満や不安をぶちまけてさっぱりして帰っていく姿には目を見張つたよ！」

いや、しかし、それだけでリピーターになんてなるものだろうか。

「彼らには十分すぎる理由になるんだよ。ここにいる魔術師たちはエリートだからね、たとえ同じ職場の人間であろうと周りは全員ライバルみたいなものなんだ。だからこそ本音をさらけ出せる相手は少ないので、日を追うごとに鬱憤はたまつてくる。仕事の疲れと一緒にね」

加えてドクターは続ける。

「それに岸波ちゃんと話すと体が軽くなるつてもっぱらの噂だよ。おまけに岸波ちゃんって結構美人さんだからね。男性職員のリピーターが多いのはそれもあると思う。まあ、不思議なことに女性職員も同じくらいいるんだけどね？ 普通、自分よりかわいい子がいたら妬みの一つは抱くと思うんだけど……これが人徳かなあ」さらりと美人と褒められた。

何気にこうはつきりと容姿について褒められるのは初めてではないだろうか。
ウチの男どもは貧相の一言で片づけてきた記憶しかない。

これが、悪い気はしない、というやつだろうか。

「まあかくいう僕も岸波ちゃんと淹れてもらつたコーヒーが美味しくて手放せなくなつてるんだけどね。不思議だよね、本当に同じインスタント？」

ふふふ、どうやらアーチャーから学んだかいがあつたようだ。

本当なら華麗においしい紅茶でも淹れたいところではあつたが、どうも私は紅茶を入れるのが苦手らしい。アーチャーに教えてもらい挑んでみたものの、どうも中途半端になつてしまいイマイチだったのだ。じゃあ別のはどうかと始めたコーヒーの方が適性はあつたらしい。

アーチャー曰く、

『……やはりか。朝食を作る私の隣で、静かに笑つて新聞を片手にコーヒーを淹れる君

を幻視したときはもしやと思ったが』

それ、普通は逆じやないか。その立場つて朝食を作るほうが私で、コーヒー淹れて新聞読んでものがアーチャーじやないだろうか！

嫁か、アーチャー！

……まあ、アーチャーなら問題はないのか。基本的にアーチャーはおかん気質だし。つて、あれ、キヤスターの時も良妻賢母はキヤスターの方で私はどちらかというと……あれ。

いやいや、セイバーの時は……ああ嫁王だつた！　私どちらかというと新郎だつた！　愕然とする私を前に、ドクターは言つた。

「いやあ、岸波ちゃんはいい旦那さんになれるよ！　……つて、あ、岸波ちゃんの場合はお嫁さんか。あはは、違和感を全然感じなかつたね！」

……………
・ほう。

それから数日、コーヒーを差し入れるのは自重した。

以降ドクターは稀にだが、診察を終えた職員の人にラボの外に連れていかれ、帰つてくるとボロボロだつたりしたが私は関与していない。

それと以前に魔術を使用した青年がラボでの診察を終えるとこちらを見ているので手を振るとこれまた全力で頷いて早足で去つていった。

……なんの儀式だろうか、これ。

五話

あれからまた時は流れ、数日後には外部から呼ばれるエリートの集団が到着する予定である。

ちなみにマシユはカルデア選抜のAチームに入る予定だということなので、Aチームは身内といえどしつかりと見極めておかないといけない。マシユを襲う野獸がいる可能性は捨てきれない。何としても後輩の柔肌は私が守つて見せる。もう奪われる前に奪つちやうのも、なんて考えて思考を停止させる。

ダメだ、最近の私はナニ力に飢えている。

ああ、後輩と穏やかな空間でゆつくりとくつろぎたい。

——と、後輩といえば。

驚くべきことに見つけたのだ。

誰をと聞かれれば、遠坂凜と間桐桜の両名である。

同姓同名、顔立ちなんかもそつくりの、こちらに置いての二人である！……ああ、桜に關しては再現元であるから少し違うのか。加えて凛もまたしかに凛なのだが、凛の写真を見たときにふと思い出したことがあつたのだ。

——そういえば凛って、本体は金髪だつた。

そして写真の凛は月の凛と同じ黒髪。

おまけに容姿は大人びていて、その隣には仲睦ましく歩くどこか見たことがあるような男性が写っていた。いつの間に男ができたのか、と驚いていたらデータベースの年齢の欄を見てさらに驚いてしまつた。なんと既に二十歳を越えていたのである。

それはつまり、この遠坂凛は容姿こそ一緒ではあるが厳密には別人ということだ。

何故こんなデータが出てきたのか、それはドクターの手伝いで資料を纏めていた際に、招集をかけたマスター候補とされる優秀な魔術師のリストも混ざつていたのだ。当然優秀な魔術師である凛にもお呼びがかかつていたというわけである。

ちなみに桜も同様で、他にもロードと呼ばれる男性やらとかつてあつた聖杯戦争の参加者が記載されていた。驚くべきことに、というかよく考えれば予想はついたのだが、案の定この世界でも聖杯戦争は起きていたのだ。

そこに参加している凛は、なんというかさすがである。

どこに行つても聖杯と関わる運命にでもあるんじやないだろうか——人のことと言え

なっただけど。

加えてレオにも要請が言つたようだが、跡取りを出せるかと断られているらしい。いやいや、月じやまんまその人が殺し合いに出張つてましたからね？ 負ける可能性なんてゼロであるとばかりに威厳を保つて太陽の騎士と参加してたからね？

あ、門司にも要請は行つていた。どうやら門司、常識はずれの破戒僧つぶりは相変わらずのようであちこちの遺跡やら神社やらに出没しているらしい。ただその神出鬼没であるため要請を出しても届かないらしい。物理的に。

残念だつたのがラニについて欠片も分からなかつたことだろう。アトラス院はだいぶ閉鎖的らしく、演算装置を貸し出してもらえただけ奇跡だとドクターが言つていた。と、まあそんな感じで友人たちの近況である——と、二人ほど忘れていた。

なんとシンジを発見したのである！ しかも本体の年齢は桜の一つ上で、月とは違つてすでに成人していた。違いがあるとすれば他には、彼は魔術の才能がからつきしであるということか。月において私よりもはるかに優れていた彼がとと思うとやるせなくなるが、それで彼のいいところがなくなつてしまつたわけじやない。

私はできるシンジを知つている！

それとジナコも確認した。ジナコが食いついてきそうなスレを建て、餌をぶら下げて待つたらそれはもう見事に釣れた。相変わらずゲームに関しての腕前はすさまじい

らしく、彼女のネームは世界中にゲームーが知っているレベルであつた。流石である。

そのウチ大会でも見に行きたいものである。

——ちなみに、凛も桜も要請は断つていた。

桜はもう魔術師ではないらしいし、凛はよく分からぬが『世界の危機とかお人よし
が食いついたら止められないから二度と来んな!』と返事が返されてきたらしい。どう
やら凛はまた厄介な人物に捕まってしまつたらしい。世界の危機に食いついたら離れ
ないお人よし……あれ、なんで今ギクリとしたのだろうか。

どちらかというとそれはアーチャーだと思うのだが……まさか?

——何にせよ、どうやら私は今回彼らとの接点を持つことは難しいらしい。

ま、すべてが終わつた後に押し掛けるとしよう。

また、最近になつてまた私の周囲に変化が起きている。

どういうわけかここ数日間、ずっと私の傍にマシユがいるのである。

確かに最近は午前のトレーニング後は仕事が忙しくて会話をしたりゆつくりとするこ
とができなかつたが、どうしてこうなつたか。いや、私としては可愛らしい後輩が親ガ
モノの後ろをついてくるかの如く離れない姿は至福である。

しかしトイレの前で待機しているのはいかがなものか。

そこで何があったのかをマシユに聞いてみたのだが、

「先輩の身辺警護のためです」

と言つてチラチラと廊下の向こう側を注視していた。

その視線の先に誰かいたような気がするが、慌てたように走り去つていった。
うん、わからん。

「それでは先輩、行きましょう。この後、何かご予定が？」
いや、特にない。

今日はドクターも受け入れ準備で忙しいらしく、私も久しぶりにお休みである。
なので部屋に戻つてゆつくりしようかと思つていたのだが……。

「…………！　あ、あの、先輩。それでしたら……マッサージでもいかがでしょうか！」
ここ数日の特訓を得て、ドクターが滝のように涙を流すレベルから、ドクターの顔が引きつ
るレベルまでランクアップしました」
却下で。

「そんな…………!?」

それよりも一緒にのんびりしよう。

ここ最近はマシユとの時間も取れていなかつたし、久しぶりにマシユとの時間を過ご

したい。

「そ、それはずるいです先輩。はい、私でよろしければ、お付き合いさせていただきます」
一人こつそりと拳を握る。

あつぶねー、危機は脱した。

いや、できるならばマッサージを受けたいとも思うのだ。しかし先日ドクターが、
『ははは、なんだか最近ね、痛みに……慣れてきちゃってね……このままだと僕の到達点
が心配で心配で』

と引きつった顔で言っていた。

私がマッサージを受けるのは、ドクターを笑顔にできるようになつてからでいいん
じやないかな！

——ドクターの犠牲を無駄にはしない。

「それで、どちらにいかれるのですか？　今の時間ならばカフェテリアも空いていると
思いますが……」

カファテリアもいいが、それよりも私の部屋へいこう。

月では私的な時間を過ごせる場所がマイルームしかなかつたからか、ゆっくりしたい
と思うと真っ先に浮かび上がつてくるのが自分の部屋だつた。それにマイルームなら
ば外部からの邪魔は入らない。一人でのんびりするにはちょうどいい空間なのだ。

マシユを連れて自室へ入り、ひよいとベッドへと座らせる。

「な、流れるように、抵抗もできずに座らされてしましました……」

今日のマシユはお客様なんだから、もてなすのは私の役目である。

以前聞いたところマシユはあまり『外』のことを知らないのだという。そこにどのような事情があるのかは分からぬが、私にできることがあるのならば『外』にはどのようなものがあるのかを伝えたい。

まあこの世界の外がどうなつてゐるのかは私も良く知らないんだけどね！

そこで大した違いがないと分かつた食べ物でも作つてみようと思つたのだ。材料は既にそろえてあるし、機材もドクターに頼んで搬入済み。アーチャーが見ても及第点はもらえるだろう料理道具を準備してあるのだ！

あ、お金はカルデアからお給料をいただいてるので支払いはそれ。

何気に追いはぎや宝探し以外で初めて自分の力で手に入れたお金だつたりする。まあここにいても使い道はないので、今後の自分のため後輩のためと思えば痛くもない出費である。ここには取り立て人もいないうだし。

「先輩の部屋が、こう、見たことがないほどに生活感があふれています……」

そうだろうそうだろう。

マイルームの改ざんなんてできなかつた私が、どれほど模様替えというものに憧れて

いたか！

一応いっておくけど私も女だ――！

「ああ！ 落ち着いてください先輩！」

む、 そうだった。

こんなことをしている場合じゃない。

今日はマシユに、 私の好きなものを食べてもらういいチャンスだと思つて誘つたのだつた。

「先輩の好きなもの、 ですか。 とても興味があります。 ウドン、 オスシ、 オソバ、 テンプラ……先輩の出身地である日本の食べ物ですね」

確かにそれは日本の食べ物である。

しかし、 今日は日本関係なくデザート系で攻めていこうと思う――プレミアロールケーキで。

それ以外の選択肢とかない。

「ロールケーキ……スポンジを丸め、 中に生クリームを入れた食べ物……ですか？」

うん。

至高の甘味。

「今、 先輩の変わらない表情の中から少しだけ読み取れた気がします……先輩をそうま

でさせる食べ物なんですね」

そうなのである。

あれには何度も救われたことか。

大量購入した果てに消されかけたので、購買の店員に貴方からマークを奪うようなものと言つたら固定化してくれた。それからはMPが切れそうになるとモシャリと食べる、同時にカロリーも摂取し体重計が怖くなるのだ。

「ですが先輩、材料はどうするのでしょうか。ここは最果て、材料なんてどこにも……」ドクターに頼んで通販してもらつた。

「一応……機密いっぱいの人類の重要な拠点なんですが……」

何にせよ準備は整つている。

「うう、先輩一人に負担をかけてしまうのは……いえ、マシユ・キリエライト、待機します」

うん、そうして欲しい。

何気に私も誰かのために手料理を作るなんて初めてなので緊張した。

「先輩の……初めての手料理……何でしようか、胸の奥が温かになりますね」頬を染め、クスリと笑うマシユが可愛すぎる。

ああ今すぐ道具を放り投げて抱きしめたい衝動に駆られててしまう……！

しかしそんなことをすればアーチャーにお説教されてしまうので自重する。

「……あ、ですが先輩、緊張したと表現が過去形のような気がするのですが」

いいところに気が付いた。

まあ見ていてほしい。ドクターに見せてもらつた料理番組をちょっと真似してみたのだ。

まず生地ですが——完成品があるのでそれを使います。

「スポンジ用の粉の意味が……！」

大丈夫、ちゃんと完成品も手作りである。

続いて生クリームですが——これも完成品があるのでそれを使います。

「ああ、生クリームまで……と、ここまで流れならばフルーツも……？」

うん、すでにカット済みなのでちりばめるだけである。

それをマキマキすれば完成。

「何でしようか……嬉しいのですが何か寂しいような……先輩は、色々な感情を体験させてくれますね」

褒められているのか褒められていないのか。

まあ何にせよ後は巻くだけなのだが——これもすでに完成品がある。

「ああ。遂に唯一残された作業まで……」

冷蔵庫から取り出してマシユの元へ。

あれ、違つたのだろうか。ドクターが持つていた動画だと、大抵のものがすでに準備されていたのだが。

まあ、元々の目的は食べてもらうだけではないので一先ず置いておく。

「とても美味しそうです。できるなら最初から先輩の料理姿を見てみたかったという思いもありますが、それはそれ―――いたします」

そういうながら一口。

するとピタリとマシユは動かなくなり、どうしたのかと不安になる。

私の味覚がおかしくなければ、いい感じに再現できていたと思うのだがさて。
ちゃんとちゃんとマシユをつづいてみれば、突然胸に頭突きを食らつた。

――ふぐう。なんの、これしき。

「美味しい、です……美味しいです、先輩。私も初めてだと思います。こうして誰かに、私のためだけに料理を作つてもらえたのは、嬉しいのに、涙が流れたのは……初めての体験です」

その言葉に、一瞬だけ思考に空白が生まれる。

つまりマシユは今の今まで、誰にか何かを作つてもらうという経験をしてこなかつた

ということか。私だってただのコピーであつたから、そのような経験は最初こそなかつたが、私のために誰かが何かをしてくれるなんてことが良くあつた。

凛もそうだしラニだつてそうだ。

自分のサーヴァントたちだつてそう。

アーチャーの料理はどこか懐かしいような味がしたし、キヤスターの料理は心が満ち足りた。

エリザベートだつてアレだつたが、実は結構嬉しかつたりしたのだ。

——そんな気持ちを、私はマシユに与えられたのだろうか。

なんだかおこがましい考え方だが、嬉しいと思つてしまふ自分がいる。

自然とマシユのサラリとした髪に手が触れて、腕の中に閉じ込める。

「なんだか、先輩と出会つたから、色々と貰つてばかりな気がします」

——マシユが望んでくれるなら、私にできることは何だつてして見せる。

かわいい後輩が笑つてくれるなら、多少の苦労くらいどうということはない。

何せ世界を救うためとかいいつつ桜のために戦つて、魔性菩薩を滅ぼしたくらいだ。

それに比べれば大半の事はどうということはないのである。温かい料理が食べたいと

いうのなら、大したことのない腕前の私でいいのなら心を込めて作り上げよう。

「先輩はきっと、気づいていないのだと思いますが——私は先輩にいろいろなものを見

貰つてばかりです。何かを返したい、はつきりと私自身がそう感じています」

そういうつてマシユが顔を上げれば、そこには尊いと思える笑顔があつた。

見上げるよう私を見て笑顔を浮かべるその姿は——ちよつと私の理性を崩しにかかつてきただ。

おつと、びーくーるだ私——セイバーのときの過ちは繰り返さない。
——なら、マシユも私に作つてほしい。

「…………え」

幸い、材料ならば丁度ここにある。

スポンジは作つてあるし、生クリームだつて、カットフルーツだつてある。

一からとは言えないが、私が作つたものの材料がすべてそろつているのだから。スポンジにクリームを乗せカットフルーツを散りばめる。それを綺麗に巻いて何等分かに切り分ければ完成である。

「……ですが先輩。やっぱり私は——」

——最初の一歩を踏み出すのなら、これくらいがちょうどいい。

「最初の一歩……ですか？」

そうだ。

相手に何かを作る体験、そのはじめの一歩。

それはどんな感覚なのか、どんな思いを抱いているのか、それらを知る一步。

——それを理解して、最初から作りたいと思ったのなら……一緒に一から作ろう。スポンジを一から、生クリームを一から、フルーツを切ろう。

その原材料だつてまだ私の部屋に残っている。

作りたいと思えたのなら、今すぐにだつて作れる環境はすでに整つている。

「先輩…………もしかして、その為に材料を……」

考えすぎである。

ドクターが見せてくれた料理番組がなんかBBチャンネルに似てるような気がして魅入つていただけだ。

その結果、よしこれで行こうと決心した結果に過ぎない。

巡りあわせが良かつた、それだけなのだ。

「——なんで先輩がああまで気難しい職員の方々と仲良くなれたのかが、よく分かつた気がします。よろしくお願ひします、先輩……！」

マシユはそういながら、今まで見たことがないような笑みを浮かべてそういつた。

その笑顔が見れただけで、私は報われたような気持ちになるのであつた。

その後、一緒に一から作つてクリームまみれになつて互いに笑つて、完成品を冷蔵庫

に入れて一緒にお風呂に入った。お風呂上りに牛乳を飲み、冷えたロールケーキを食べてその美味しさに口元が弧を描く。

一心不乱にパクパクと食べるマシユが可愛くて、昔セイバーにやつたように口元へとケーキを運べば視線を迷わせ恥ずかしそうに口に含む。何か訴えるような視線を感じたが、ただ可愛いだけで私的にはノーダメージである。

途中でドクターが様子を見に来たが、ドクターは嬉しそうに笑いながらこそと帰つていつた。その後、私とマシユにお呼びがかかることはなかつたことから、ドクターが気を利かせてくれたのだと思う。ずるい上司である。

その日はずつとマシユと共に過ごした。

疲れてうとうとするマシユを制服のままベッドに放り込んで抱えて眠る。

抵抗する様子もないでのそのまま布団を被れば、

「温かいです……せんぱい」

そんな可愛らしい声が私の耳をくすぐつた。

その翌日、マシューがまた廊下の向こうを注視していたのでどうしたのかと見てみれば、なぜかマシューは勝ち誇った顔をしていて、視線をずらすとまた走り去っていく影が見えた。行きましょと声をかけられたので移動を再開したが、あの影の謎は深まるばかりである。

追伸：私にマスター適性がみつかつたらしい。

六話

さて、先ずは説明しなければなるまい。

私にマスター適性があつたことが唐突に判明したその経緯を。まあ理由はどうせムーンセル云々のせいだと思う。一度マスターとして聖杯戦争に参加した身だからとかそんな理由に違いない。ムーンセルの聖杯戦争とこつちの聖杯戦争は仕組みから別物だけだ。

何にせよ、そのような理由があつたにせよ、適性があるのは変わらない。
ではなぜ、適性が判明したのか。

Aチーム着任を確認した私はふと、マシユもマスターであつたと思い出したのだ。同時にマシユはどこのチームなのだろうかと疑問が生じた。そこで直接マシユにどこチームに所属する予定なのかを聞いてみたところAチームだと伝えられた。

A チームはエリートだ。

しかしその優秀さから特異点へのレイシフトで最も先に送られるチームであり、その危険度は計り知れない。共に戦闘訓練を行つてきたマシユだが、身体能力の方は実際に私の方がよき方であり、そのことから少々不安になつて言つてしまつたのだ。

——私もマシユと共に受けたらよかつた。

するとドクターが、適性がない岸波ちゃんじや難しいかな——といったところで固まつた。

マシユと二人ではてと首をかしげていると、

『あ、あれ……そりいえば岸波ちゃんつて——適性検査受けてたつけ?』

思い返して、

——あ、私受けてねー。

『そ、そりだつた!? 最初、カルデアのデータベースから岸波ちゃんの情報が見つからなかつたから、マスターになれない、もしくはなれなかつた部外者だと思つてたんだ! そのあとで岸波ちゃんが魔術師だつてわかつたから……!』

ことの顛末。

カルデアに來たけどデータがない。つまりマスター適性のない一般人などの部外者。しかし保護した後で魔術師だと判明し、その後の検査も調べたのは健康状態と身元を調

べるための魔術刻印の有無に関して。マスターなにそれおいしいの状態であつた。

そもそも大したことのない回路数の私が適性ありだとは思わなかつたのだろう。

質はいいんだからね、質は！

と、そんなこんなで検査を受けたら見事にヒットしたわけである。

『なんで、なんでよ。なんで私になくてこの人畜無害で凡人の理想形みたいなのが適性あるのよー！』

涙目の所長がなんだか可愛かつた。

と、そんなこんなで適性が見つかつたのだ。

後にドクターは、

『ドクター……取り返しのつかないことを。先輩が……先輩がもつと危険な道に！』

と私を心配し怒ってくれているマシューに連れていかれた。

その後ぞろぞろとスタッフも抜けていったが彼らが何をしに行つたのかは分からない。

『もういいわ……なんだか貴方と張り合おうとすると私だけ一方的に疲れていく気がするから。いい、貴方もマスターの適性が発見されてしまつた以上、戦闘訓練はより密度の高いものになるから覚悟しなさい』

と、それから数日はより密度の濃い戦闘訓練を受けさせられた。

サーヴァントとの共闘を想定したドールでの訓練はもちろん、他マスターとの連携や支援魔術の運用方法。靈脈の見つけ方やら簡易拠点の設営方法だとか、それはもう一月で終わらないような内容をみつちりと。隣に癒しのマシユがいなければ力尽きていただろう。

流石に力尽きて倒れたときの膝枕はHP全回復の効果があつた。状態異常『魅了』つきだつたけど。

その後、急遽現れた新しいマスターということで靈子筐体クラインコフainの用意がされておらず、仕方なく一般枠の一名を減らし私用に調整することと相成った。作業を突貫で行つてくれた職員の方々には感謝である。

——そして、その時は来た。

今私の目の前には、各地より選ばれてやつてきた魔術師たちがずらりと並んで所長の話に耳を傾けていた。幸い、所長の予定していた時間通りにことは進んでいるため時間のロスは見られないし、何より所長の機嫌が悪化することもない。

話の途中、所長のあんまりな言い方に反発する声が上がりはするが、現在世界がどのような状況なのかを説明すると理解力のある彼らは息をのみこんだ。ほら見なさい、これが正しい反応よと言わんばかりに所長の視線が飛んでくる。
だつて経験したことあるんだもの。

そして所長たちは世界が滅亡に向かう原因ではないかと予想される特異点の話をす
る。本来なかつた場所に生まれた特異点Fは、西暦2004年の日本のとある地方都市
——ぶつちやけ冬木と呼ばれる凜の生まれ故郷である。加えて、カルデアの召喚シス
テム『フェイト』を開発するにあたつて参考にされた、この世界の聖杯戦争が起こつた場
所でもある。

それを聞いたとき、冬木つて呪われてるんじやと思つた。

「ではこれより一時間後、初のレイシフト実験を行います。仮想訓練はもう十分でしょ
う」

そういうながら所長の視線はまたも私に。

当然うなづくことで返す。

「まず第一段階として成績上位者8名をAチームとし、特異点Fに送り込みます」

ちなみにこの8名、カルデア内から選抜されたマスター適性者である。

要するに私たちの身内から出たマスター。

かといつて最員とも言えず、一月ほど前からチームとして訓練を行つてゐる為彼らの
練度は高いものとなつてゐる。私もその内の一人に入れればよかつたのだが、ほぼ完成
した連携に新人が入つても数日で修正できるはずもなくあえなく待機組。
それも待機組の更に後発組である。

「Aチームは先行しベースキャンプを設立。後に続く貴方たちの安全を保障します。Bチーム以下は彼らの状況をモニターし、第二実験以降の出番に備えなさい。……ではさつそく靈子筐体の個人登録を行います。いい、代用の利くものではないから丁寧に扱いなさい」

そういうつて所長は指示を出していく。

BからDのチームは今回のレイシフトでは待機組で、Aチームに異常が発生した場合に備えて待機するため靈子筐体(クラインコブイン)の中はずつと待機しなければいけないので。私も事前に登録する際に入ったが、なんとも息苦しいような、どことなく懐かしいような感覚に陥った。

と、それはともかくである。

待機組といえど私にも今回は仕事があるのだ。

——じゃあ一人づつ並んでください。

ス、と手を上げて存在をアピールすると、マシュを筆頭にAチームが終結。

その統率の良さに感心しながら、これとこれとこれ、などと今から使用する魔術を選択する。

そう、今回の私の役目は万全を期すために支援の魔術をガン積みすることである——私のMPが空になるのを承知で。まあ私がヘトヘトかつ動けないほどに疲弊したとし

て、人の命が助かる可能性がグンと上がるのなら安いものである。

どうせ私は待機組だし。

こういう理由もあって、待機組が出撃する状況でもさらにその後からだ。

— gain — l ck (32) で幸運強化！

— gain — m gi (16) で魔力強化！

— gain — str (16) で念のために筋力強化！

— gain — con (16) で耐久力強化！

それを8人にかけ——力尽きる。

途中で魔力が切れかけて、プレミアロールケーキを食べて回復したものの魔力の残量が心もとない。かつてのマスターLV MAXの私ならプレミアロールケーキを食べずとも余裕があつたかもしれないが、最低限の強化だけで今の私ではこのぎまだ。

「ありがとうございます、先輩。必ず無事に帰ってきます」

「よし、それじゃあ岸波ちゃんは僕が医務室へ連れていくよ。マシユも気を付けて」

駆け寄ってきたドクターが予定通りに肩を貸してくれる。

しかし、プレミアロールケーキで回復した魔力がまだ少しだけ残っている。どうせ私はしばらくの間動けないし、レイシフトに参加できないのだから使い切つてしまふのが吉だろう。もはや蟲貝にしかならないが、私にとつてマシユはかけがえのない人の一人

なのだ。

そんなことを考えていると、表の聖杯戦争で二人のうちどちらを選ぶのかという最悪の選択肢が浮かび上がる。私は確かにその時、自分のエゴで選び自分勝手に生きることを押し付けた。それまでの戦いで何人ものマスターを倒したうえで。

それでも私は変わらない、変われない。

— gain — con (32) !

「先輩!? それ以上の魔術行使は……！」

先ほど以上の耐久強化。

使用した魔力は1・5倍近くだが、その効果はよく知っている。

代償として回路に痛みが走るが、

——これくらい、大切な人を失う痛みに比べれば大したことなんてない。

「岸波ちゃん……君つて子は。僕、男として自信を無くしそうだよ。でもここは医者として言わせてもらう。自分の限界を超えた魔術の行使は危険だ。最悪の場合制御ができないし、岸波ちゃん自身に悪影響しか与えない。これ以上の無茶はもうしないこと」ドクターに言われ、反省も込めて黙つてうなづく。

「それじゃあ僕は岸波ちゃんを連れていく。早く帰つて来て、岸波ちゃんを安心させて

やつてくれ。じやないと自分を顧みず乗り込んでいそうな気がする」

「はい、必ず帰ります。先輩。帰つたらまた、ロールケーキを」

——うん、また作ろう。チョコとか抹茶もいいかもしれない。

「抹茶……日本の飲み物ですね。楽しみです——」

そして、気づけば私は自分の部屋にいた。

おかしい、確かにドクターは私を医務室に連れていくとのことだつたが。

「あ、起きたかい？　いやあごめんごめん。実は医務室、コフイン内のバイタルデータを映し出しているから音がうるさくてね。これといつた異常もなかつたし、医務室じや気疲れしてしまったと思つたから岸波ちゃんの部屋に連れてきたんだ——つと、勿論カギは所長が開けてくれたんだよ？」　不法侵入じやないよ？」

成程、そういうことか。

しかし医務室から私の部屋までそこそこの距離があつたはずだが、重くはなかつたの

だろうか。

「いや、まあ、機材に比べれば全然軽い——アイタア!?」

別に重いとか疲れたとか言われても運んでもらつた手前黙つているつもりだつたが、機材と比べられるとなけなしの乙女のプライドが唸りを上げる。ダメだこのドクター、女心のおの字すら理解していない。研究職つてみんなこうか!

「ごめんごめん、こういう時なんて返せばいいのか僕には経験値が足りないね。もつと勉強しないとなあ」

それはゲームで?

「ゲームで」

脳内から改革しないとダメだなこれは。

と、それよりもレイシフトの実験はどうなつているのだろうか。

「ああ、それはまだ何とも言えないかな。実際、岸波ちゃんが意識を失つて回復するまでにそう時間は経つてない。僕も現場にいると空気が緩むつて追い出されたし、もう始まるだろうね。僕、しっかりとお仕事してるつもりだつたんだけどなー」

それは何となくわかる気がする。

ドクターが近くにいると気が緩むのは確かだ。

「あれ、それって褒められてる?」

私としては褒めているつもり。

近くにいて気が張つてしまふ人よりも私としては接しやすくていいと思う。

「……あれ、涙が。うう、人のやさしさってここまで心の染みるんだね」

グスと鼻をすするドクターだが、どんな過去を送つていたのか気になるところ。

しかしここでコールが鳴り、ドクターが応答する。

纏めてしまふと、レフ教授が新任のマスターのバイタルがよろしくないので一応来てくれとのこと。二分で。

——30秒で支度しな！

「無理だからね!! ここから急いで走つても5分はかかる！ ああ、見栄を張らないで追い出されたつて素直に言うんだつた！」

——まあ冗談として。取りあえず私も同行してもいいだろうか。

「岸波ちゃんが？ いや、でも体調は平気かい？」

全然大丈夫である。

これでも痛みには耐性がついている方だし、そもそも魔力の使い過ぎは慣れっこだ。今すぐ激しい戦闘に巻き込まれさえしなければ問題ないと断言できる程度には回復している。

「タフというかなんというか。わかつた、連れて行こう。でも少しでも体調が悪くなつ

たら言うこと。約束できるなら連れていくよ」

約束するという意味を込めてうなずくと、ドクターは疑わしいとばかりに視線を送つてくるが諦めたように立ち上がる。私もそれに続いて部屋を出るが——その瞬間、事態は急変した。

館内の明かりが消失し暗闇に包まれる。続いて鳴り響くのはカルデア中に響き渡る大きな爆発音。それを追うように管内全体に緊急事態発生のアラームが鳴る。耳を澄ませてアナウンスを聞けば、中央発電所と中央管制室で火災が発生したこと。

「一体何が起こっている!? モニター、映像を——」

——気が付けば走り出していた。

「岸波ちゃん!? せめて君は隔壁が下りる前に避難を——!? つて速い、速いって!」

中央管制室はマシユや所長が、Aチームの仲間や新しくやつて来た魔術師たちもいる場所だ。そこで起きた火災——恐らくは爆発音がしたことから何かが爆発したのだろう——なんて嫌な結末しか運んでこない。爆発に巻き込まれたのか、その後の火災にそ の身を焼かれるのか、どちらにせよ人が死ぬ。

いつの間にか肩にしがみついていたフォウをわきに抱え走る。

そしてたどり着いたその先は——

——地獄そのものだった。

所長が誇らしげに語っていた『カルデアス』を中心とした管制室は赤い火の海で覆われていた。見渡せばコフィンも大きなダメージを受けており、ひしやげていたりガラスが飛び散つたりと中を覗き込むのが怖いものが多い。

後から息を切らせて走つて来たドクターは、その惨状を見て息を飲むがすぐに自分のやるべきことを確認し私に指示を出す。

「見ての通り、無事なのはカルデアスだけだ。生存者は絶望的……どうやら予備電源の切り替えも上手くいってない。僕はこれから手動で予備電源への切り替えを行いに行く。岸波ちゃんはすぐに避難するんだ。爆発の起点から見て、事故じやない。あそこに爆発するようなものを置くほど、カルデアの技術者は馬鹿じやない」

——つまり、人為的な破壊工作？

「恐らくね。もしかするとその下手人がまだ潜んでいる可能性もある。せめて無事だつた君だけでも戻るんだ。万が一のシエルターの場所は分かるね？」いいかい、寄り道なんとしててる余裕はないぞ！ 外に出られなければシエルターに、外に出られれば外部の救助を待つんだ！」

そういうつてドクターは予備電源へと切り替えるために姿を消した。

私はどうすればいいのか——自問自答する意味もない。

問うまでもなく私がすることは、可能性にすがつて生存者を探すこと。

『システム レイシフト最終段階に移行します。座標 西暦2004年 1月 30日
日本 冬木』

『ラプラスによる転移保護——成立』

『特異点への因子追加枠——確保』

『アンサモンプログラム——セット。マスターは最終調整に入つてください』

アナウンスが何かを言つているが、頭になんて入つてこない。

しかし体は勝手に動き、以前職員の人から聞かされたコフインの冷凍保存機能の話を思い返す。緊急時用の生命維持手段。本人たちの了承が無ければ重罪行為とされるらしいが、本人たちも何もわからず焼け死ぬよりはマシなはずだ。

無事な端末から元ウイザードとしての技量を最大限に發揮し、全コフイン内の絶命の危機にあるマスターに対し冷凍保存の処置を実行。幸い死者の表示は一つもない、まだ無事なのだ。しかしエラーが続発し原因はと調べれば圧倒的電力不足。仕方なしに電力復旧と共に処置の開始を予約し再び足を動かす。

マシユがいない。

端末から調べたコフイン内のマスターにマシユがいなかつた。

汗が流れ落ちる。

喉が焼けるように熱い。

所長は、レフ教授は、カルデアの職員たちはどこにいる
…………なん、で。せん、ぱ、?一

なん、で、せん、ぱい？」

ガラリ、瓦礫が崩れる音がして、声が聞こえた。

慌てて振り向けばそこには血を流しふらりと歩くマシユがいた。

——無事か、マシユ……！

「私は、なんとか。いくつか、骨が折れでは……いますが、生命活動の維持に支障はありません。私はコフイン外で、レイシフトの立ち合いをしていたのが幸いでしたが、他の皆さんは……」

——良かつた、本当に良かつた。

「せんぱい……何故、来てしまつたんですか。隔壁も閉鎖、電源も戻りません……このままでは」

——大丈夫だ。ドクターが電源を戻しに行つた。それよりも、本当に大丈夫なのか
「は、い。恐らく、先輩のかけてくれた魔術のおかげかと。耐久は勿論ですが、飛んでき
た破片が致命傷にならなかつたのは……先輩の不思議な魔術のおかげです」

———
そ う か g a i n | 1 c k (32) か。

あれは幸運を上げる魔術だ。

ということは、他の7人のAチームも無事な可能性がある。とはいってもコフィンの中で

逃げ場はなかつただろうから、せいぜい死ななかつた程度で重症の可能性が高い。後は電力復旧後のコフインの判断に任せることにした。

取り合えず一段落——とはいえない。

再び耳障りなアナウンスが鳴り響く。

『観測スタッフに警告。カルデアスの状態が変化しました。シバによる近未来観測データを書き換えます』

無機質なその声に嫌な予感がする。

「こういうときの私の勘は大抵外れてはくれない。

『近未来百年までの地球において、人類の痕跡は『発見』できません』

マシユと共にカルデアスを見上げれば、赤く染まり人類の痕跡がかき消されていた。

これは不味いと思うものの、現状を打破しなければ関係のない話となる。

——しかし、隔壁はもう閉まってしまった。

「これでは、もう……そと、には」

障壁をあける手段はない。

『コフイン内のマスターのバイタル、基準値に達していません』

アナウンスが淡々と響く中、マシユの手を握り締める。

この程度の危機がなんだ、神靈を越えるだろう相手との戦いより、女神の集合体と戦

うより、自分たちよりも格上の存在たちと戦うより、今のこの状況が絶望的であるはずがない。あるはずが、ない。——でもここには、そのすべての時を共有した、仲間がない。

身体が震えた気がした。

——せめて、マシユだけでも。

魂を燃やして、魔術を行使しよう。

『アトラスの悪魔』か『赤原礼装』の一度くらいなら行使できそうだ。

この世界に来てからこんな強引な魔術の使いかたは初めてだが——

「——」だめです、先輩。私にも、今のせんぱいの次の行動が、わかります

そういうつて、マシユの体が寄りかかってくる。

温かく、鼓動の音が心地よい。

「せんぱい、私にとつてせんぱいは——今私のすべてです」

——言葉を失つた。

「今の私なら、わかる気がします。せんぱいがいない世界なんて考えられないし、その中で前を向けるほどの精神強度がありません。私にとつての世界の割合はカルデア2、フォウさん2、せんぱい6です」

——あ、重かつた。めっちゃ重かつた。でも何だろうか、心地よい重さだ。

よく考えると、『桜』にも同じように愛されていた、愛してくれていた。その好意がとてもくすぐつたくも心地よく、私の原動力の一つともなっていた。マシユの好意が家族としてか、桜と同じものかは別としても嬉しいことに変わりはない。

その想いだけで、まだ私は立ち上がることができる。

「ああ、やつぱり後輩つて——いいものだ。眼鏡も素晴らしい」

手を握る。

寄りかかつてくる体を、骨を痛めないように抱きしめる。

失つてはいけない温もりがここにある。守らなければいけない世界がここにある。

その世界のうちに私も入つているというのなら——意地汚く生きて見せる。

——早く復旧、復旧はよ！

そうドクターに強く念じれば、

『レイシフト開始まで 3、2、1——全行程完了。ファーストオーダーの実証を開始します』

再び聞こえた無機質な声。

それを最後に、私の意識はあつけなく落ちていった。

特異点F 炎上汚染都市 冬木

七話

「……揺すつても起きてくれません。この危機的状況の中、流石です」

——誰かの声が聞こえた気がする。

そして、何かに頬を舐められたような感覚。

徐々に徐々に、私の意識が覚醒していく。

「おはようございます、先輩。その様子だと快眠できたご様子、なによりです」

——ああ、おはようマシユ。それとフオウ。

私の頬を舐めていたのはやはりというか、リスっぽい生き物であるフオウであった。

彼、彼女はなぜか嬉しそうにステップを踏んでおり、そのふわふわもっこもした尻尾が宙で踊る。無意識に手が伸びかけるが、取りあえず自重する。

「……先輩、あの、少しよろしいですか？」

そういわれて、私はようやく地面に横たわっていたことに気づく。

道理で背中が痛いと思ったが……はて、一体ここはどこなのだろうか。あれか、また雪山に放り込まれたときのように今度は真逆の灼熱地獄か。流石の私も主犯格を起訴せねばならなくなつてきたようだ。私の人権はどこ行つた。

と、言うかである。

——マシユがコスプレしてゐる件。

「ち、違います！ これには少々事情が……！」

何故か眼鏡は外れていて、なかなかに露出の高い軽装の鎧のようなその姿は懐かしい面子を思い出す。何より、私の知つてゐるマシユと比べてその身が秘める魔力の質が別物だ。そして私は近い存在をこの目で見続けてきた。敵として、味方として。

うん、まあ事情はあるのだろう。

何せ私たちは先ほどまで目の前に死が迫る危機的状況下にいて、今度は場所こそ違うが辺り一面火の海の都市にいるのだから。明らかに室内とは異なる空氣、空間、黒い煙が覆いつくす赤い空——本当にどこなのだろうか。

まあ取りあえずマシユがこうして無事だつたことに安心だ。フオウが着いてきてしまつたのは、直前まで私の傍にいたからだろう。……今思えば火の中に飛び込む私につ

いてくる獣って、どれだけ度胸のある生き物だ。

「まったくブレないその様子、見ていると私も安心してしまいます……いえ、そうではなく。今はそう悠長に説明している時間はありませんので、端的に」

マシユの前置きに、体を起こす。

そうしてマシユは、私の後ろにいるナニカを指さして言つた。

「——どうやら、未だ死地からは抜け出せていないようです」

後ろを見れば——そこにいたのは形容しがたい、僅かながらに人の形をとる化け物。かつて私が闘つてきた純粹な殺意のみの敵性エネミーとは違う、生き物らしい殺意と怨嗟を含む現実味を帶びたナニカだ。

思考が力チリと切り替わり、考える。

「先輩——いえ、マスター。私に指示を。事情の説明をするためにも、この場を乗り切ります」

マシユが前面に展開するのは、体よりも遥かに巨大な盾のような武装。

あれで戦うとなると——やつぱり殴るのだろうか。ああ、私の可憐でおしとやかで無垢な後輩が……！

「あ、あの、マスター。できれば指示を……！ 正直に言つてしまえば私、自身を前面に出しての戦闘経験はゼロです。それはもう草食動物と同等レベルです」

大丈夫、私もだから。

しかしあの敵性工ネミー、一体何なのだろうか。聖者のモノクルでも使つたら情報が読み取れはしないだろうか。いや、今は時間が惜しいからこの場を乗り切ることを最優先としよう。先ず、マシユのステータスが知りたいところだがそんな余裕はない。であれば、マシユを信じるのみである。

恐らくだがマシユは——サーヴァントになつてゐる。

あれだけ共に過ごし、戦つた仲間たちと似通つた感覚を、私が間違えるはずもない。随分前にドクター・ヤ所長の言つていたカルデアの研究の一つである人とサーヴァントの融合というやつではないだろうか。

そうであるならば、あの程度の敵は最早敵ではない。

念には念を入れて、回路は起動しておくが。

——gain|mgi(16)で魔力強化！

——gain|str(16)で筋力強化！

——gain|con(16)で耐久力強化！

「マスター、流石にこれはその、過保護なような……」回路起動、むしろすでに魔術実行済みというか

まずは小手調べだ。

ここであの敵が実は強くてマシユが致命傷とか、私が私自身を許せなくなる。

だからせめて、最初の戦いは今持てる最大の支援をするのが私の仕事だ。ただ、今の強化で回復しつつあつた魔力の大半を消費してしまつたので、最低レベルの回復魔術を後一回程度使えるかどうかレベルの魔力しかない。

ダメだと思ったのなら即撤退。

「小手調べを優に超える過剰戦力のような気もしますが、了解しました。——マシユ・キリエライト。シールダー、行きます……！」

瞬間、か細い足に踏み抜かれたコンクリートは、粉々になつて空へと舞つた。

巨大な盾が縦横無尽に振るわれる。先端の分厚いプレートの部分で敵を分割し、迫る複数体の敵に盾を突き出し粉碎する。その光景に唖然としながら頭の片隅では冷静に敵を分析する私がいる。敵性エネミーに比べて一個体の戦闘能力は非常に低く耐久力もない。ただ武装がそれぞれ違う個体が存在し、遠距離の個体が持つ弓は少々危険か。とは言えあの程度の弓ではサーヴァントの体は易々と貫けない。

問題があるとすればそれは——
私だろう。

しかしアリーナと違い、ここには身を隠す遮蔽物が多く存在している。

岸波白野は華麗に瓦礫に隠れます。

あ、敵が弓構えてるから一応防御ね。当たり所次第ではダメージが入つてしまふか

ら。

「了解しました。続いて迎撃に移ります――！」

次、大振りの一撃。

回避後に反撃――後、再度防御。

弓が邪魔だから先に排除しよう。

うん、基本的に攻撃パターンも単調でサーヴァントとは比べ物にならない。

「マスター、次は――」

弓もいなし、敵にマシユの攻撃を阻めるものもなし。

確実に敵を仕留めて、この場を離脱しよう。

「はい。マスター、いえ、先輩。やはり先輩がいてくれれば、何でもできてしまう気がします」

そういうながら、マシユは最後の敵を粉碎した。

戦闘終了後、マシユが緊張した面立ちで戻つてくる。

その視線は私の全身に向かっていて、怪我がないかを確認していることがすぐにわ

かる。この状況下で他人の心配をすることは、何とも優しい後輩か。そんな後輩を安心させるために軽く体を動かして健全であると伝える。

「お怪我がなくて何よりです、先輩。加えて、戦闘での的確な指示ありがとうございました」

別に感謝されることでもない。

矢面にマシユを立たせているのだから、私は後ろからサポートするくらいでなければ釣り合いは取れない。というか、現状では釣り合いなんて取れていない。危険度は圧倒的にマシユの方が高いのだから当然である。

……さて、取りあえず一段落着いたところで。

「……はい。先輩の考えている通りかと。一緒に訓練していた先輩はご存じだと思いま
すが、私の運動神経は並み以下。居残り訓練が日常のインドア系研究員。それがかつての私です。その私がこうして戦えたのは一重に――」

その時、マシユの言葉を遮るかのように電子音が鳴る。

それはいつもドクターから連絡を受けるときの音で、もしやと考えていると案の定だつた。

『よ、ようやく繋がった！ こちらカルデアの管制室だ、聞こえるかい!?』
「ドクターですね。こちらAチームメンバー、マシユ・キリエライトです。現在、先輩と

共に特異点Fにシフトしています。両名、心身ともに問題はありません』
ん、あれ、今、特異点Fって聞こえた気がする。

それって確かに元々レイシフトする予定だつたあの―――あ、そういうえばアナウンス
がそんなことを言つていた気がする。つまりは、あの危機的状況下でもファーストオーダーは開始され、あの場にいたマスターである私たちがこうして送られたということ
か。

あれ、でもレイシフトつて靈子筐体クラインコブインが必要だつたと思うのだが、まあおいておこう。
「レイシフト適応、マスター適応、ともに良好。流石は先輩です」

『あー、やつぱりか。やつぱり岸波ちゃんもレイシフトに巻き込まれたのか。どうせ逃
げてつて言つても素直に出ていくとは思わなかつたけどこう来たか！ いやまあ、コ
フィンもなしに意味消失に耐えてくれたのは幸いだ。……なんでか、意味消失くらいな
ら岸波ちゃん耐えきつちやうんじやないかつて心のどこかで思つてたけど』

意味消失……ああ、成程。なんかぐわんぐわんしたやつか。
悟り開いた人に消されかけたあの時より遙かにマシである。

『お、おーい、岸波ちゃん？ なんだか遠い目をしてるけど……？ と、そうだ、マシユ
！ 無事だつたのは良かつたんだけど、その恰好はどういうことなんだい!? ハレンチ
すぎる、露出が多すぎる！ 僕はそんな子に育てた覚えはないぞ！ 岸波ちゃんつてば

ちよつと怪しいから食べられちゃうぞ!』

——よし、帰つたら覚えておけ。

この体に刻まれたツボというツボを押してやる。

『あ、目が座つた。表情変わらないのに目だけ座つた。これはマズイパターンだ、僕でも分かる! と、まあ冗談はこのくらいにしておこう』

む、うまく逃げられてしまつた気がする。

まあいい。今はそれよりもマシユの話を聞いておきたい。

「先輩は肉食ではなく、どちらかといえば草食です。いえ、正確には雑食なのですが……そうではなく。どこから話せばいいのでしょうか。先ず私の格好ですが、こちらでの戦闘を考えカルデアの制服では先輩を守れないと判断し、変身した次第です」

『戦闘、変身……? その物言いだと、マシユが戦つたように聞こえるけど——そういうば、岸波ちゃんにマスター適性が確認されたけど……適性を確定させたサーヴァントがない。となれば消去法で……キミ、なのか?』

「はい。身体状況をチェックしていただければすぐにわかるかと。身体能力、魔力回路、すべてが向上しています」

焦つたようになりデータをチェックすれば、それは間違いないと証明された。

どうやら私の予想は的中していたらしく、マシユはサーヴァントと融合しデミ・サー

ヴァントと化したらしい。

おまけにその経緯というのが、怪我を負い戦闘もままならないマシユと直接的な戦闘力を持たない私が特異点に送り込まれてしまうという事態が起こつた。そんなとき、マスターとの契約を失い消滅間際の英靈が契約を持ち掛けてきたのだという。

『体を碌に動かせない私が先輩を守るために、私自身が盾になるのが最も効率的と判断しました。サーヴァントとの契約を引き継ぐことも考えましたが、やはり負傷した私は足手まといです。先輩は優しいですから、危険に陥つても一人で逃げてはくれないことが先ほど証明されましたし』

とのことでなんか、反論ができなかつた。

特に後半部分のところとか。

その後、詳しく話を聞いてみたがマシユの中に英靈の意識はなく消滅してしまつているらしい。おまけに宝具はあるのだが、英靈の真名を知ることができなかつたのでその身がどのクラスなのか、宝具の名前も分からないので使用不可とのことだつた。

どつかで似たような状況を見たことがあるね！

『さて、状況は理解できた。これより先、マシユと岸波ちゃんは運命共同体だ。マスターを失えばサーヴァントが、サーヴァントを失えばマスターが同じ道をたどる。二人とも気を抜かず……む、通信が安定しない。予備電源に切り替えたばかりだからしようがな

いか。取りあえず、靈脈を探してほしい。そうなればこちらからの通信も安定するだろうから』

そして最後に、無茶はしないようにといつて通信は切れた。

「フォーウ！ キューウ！」

そうだった、フォウがいたんだつた。

というかドクターとの通信が繋がっている間、どこにいたのか。

おかげで報告し忘れてしまったが……まあ、後でいいか。

若干ドクターの扱いがとも思つたが、今は余裕がないということにしておく。

——じゃあ、その靈脈を目指して歩こうか。

「はい、先輩。では私が先輩の周囲、地中と上空含め360°完全にカバーさせていただきます。入り込む隙間なしです」

拳を握る後輩の姿、プライスレス。

何だかドクターすらもハレンチというこの姿に慣れてきた自分が少し悲しい。

身近なところにもつとハレンチな恰好の女の子いたからね。セイバーとかキヤスターとか、桜ズとか。寧ろ穿いてないエキゾチック美少女もいたからね！

ただ正直に本音を言うのなら——悪くない。

この微妙な露出のもどかしさ、悪くない！

「先輩、あの、どうかしましたか？」

——なんでも。さあ、目的地は近いようだし向かうとしよう。
そうして私たちは、ドクター指定の靈脈を目指して歩き出した。

「キヤ――！　なに、なんなの、コツチに来ないでー！　つて、貴方たち！？」

ああも

う、何がどうなつてゐるのかわかんないけど手伝いなさいー！」

のだが、道中、なんだか聞き覚えのある悲鳴が飛び込んできた。

八話

なんだかよく分からぬバケモノにモテモテだつた所長を救助し幾ばくか。

三人でその場を離れて身を隠せば、未だに目をぐるぐると回す所長がいた。まさに混亂の極みと言わんばかりのその様子に、ほんの少し悪戯心が顔を出すが空気を読んで落ち着くまで待つことにした。

数分もすれば所長も現実に戻り、

「……貴方よりも取り乱してた自分が恥ずかしくなるわ」

と、忌々しげにつぶやいた。

何だか所長が現実に戻るにあたりダシに使われたような気がするがまあよし。

「さて、ええと……そう、先ずはマシユ・キリエライトの状態ね。見ればわかるんだけど、デミ・サーヴァントになつたつてことでいいのかしら」

「流石です、所長。お察しの通り、現在の私はサーヴァントとしての能力を譲り受け、先輩と押し掛け契約中です」

押し掛け契約何それ可愛い。

私が知つてゐる押し掛けつて、もつと切羽詰まつたカオスなものだつた。

「まさか、本当に適性があつたなんて……今になつてようやく納得できたわ」

どうやら所長、本当の意味で私がマスター適性があつたということを認められたらし
い。

確かに私の回路の数では一流には程遠く、そもそも魔術師としての心構えもあつたものではないから認められないのも無理はないだろう。というか、月にいた当時、本当に私がマスターなのかと疑つてかかっていたのは自分自身である。

そこからマシユがデミ・サーヴァントとなつた経緯に、今現在の状況を所長へと伝え
ていつた。

今現在、遭遇できたのはバケモノと所長だけ。しかし、所長がいることでもしかした
ら他のメンバーもこうしてレイシフトしているのではないか、そんなことを思いながら
所長を見ると察してくれたらしい所長はため息をつく。

「……言つておくけど、私だってこっちで遭遇した人間は貴方たちだけよ。それに、恐らく私たち以外のメンバーはいないでしようね——ここにいるの、全員がコフインに入つ
ていなかつた人間ですもの」

そう言われて、マシユと目を合わせる。

成程それは確かにそのとおりである。

あの時私もマシユも外にいて、コフイン無しでレイシフトしてきたのだ。そもそも、コフインの端末をいじっていた時に、起動に必要な電力が足りないという情報を目にしていた。あのレイシフト時、コフインは起動しておらず休止状態だったのだ。

所長曰く、

「成功率が95%を切った時点で電源が落ちるわ」

との事で、そもそも傷を負っていたマスターたちのコフインは電力が足りてもレイシフトは行えなかつた可能性が高い。

まつたく、所長が合流してからというもの疑問が次々に氷解していく。流石はこれまでカルデアを支え続けただけはある。

「……貴方、恥ずかしくないの？」

本音だからもーまんたい。

既に羞恥心など、『はかせない』のせいで薄らいでいる。

「調子が狂うわね……！　まあいいわ。礼装を持ち出せなかつたのは残念だけど、マシユがいれば問題はないでしょ」

「自信はありませんが、お任せください。先輩の安全を第一に、頑張らせていただきます」

「貴方も変わつたわよね、ええ、ホント変な方向に変わつちやつたわよね！　所長たる私

よりそつちの草食動物を優先する辺りが特に！ もし岸波白野がマスターでなかつた場合、貴方は誰を優先して守るべきか分かつてゐるでしようね？』

「先輩ですね。判断を間違えたりはしません」

「間違えてるじゃない、初っ端から全部間違えてるじゃない！ はあ、もう、なんで私の周りはこうもおかしなのばつかりなの。レフ、レフ、貴方だけよ。ホント」

所長、所長レフ教授とかどうでもいいから——ベースキヤンプつくろ？

「ああ————つもう！ まともなの私だけ？ 私がおかしいの？ 誰一人私を慰めてくれないけどどうなつてるのよ！ いいわよ、さつさと終わらせて休ませてもらいます

！ 霊脈探して——つてここかア！」

ああもう嫌だ調子狂う、そういうつて虚ろな目で私を見る。

おおう、ガラス玉のような無機質な目はちょっと怖い。というか、今のは私ではないと思うのだ。

「もう、疲れたからさつさとしましょ。マシユ、貴方の物騒なそのデカイ盾を置いて。触媒にして召喚サークル設置するわ。貴方はその間、しつかり周囲をマシユと一緒に見張つてなさい。一匹でも通したら、貴方の頭に Gandor ぶち込むわ」

ガンドつて、あのガンドか。

よーし、しつかりと見張りをさせていただきましょ——黒い弾幕怖い。

そうして設置されたサークルは、カルデアで見たものと非常に酷似していた。設置と同時にドクターとの通信が回復し、所長がドクターになんて貴方が仕切つてると突つかかつた。

そしてドクターの口から語られたのは、あまりにも悲惨なカルデアの現状であつた。

「——貴方より階級が上の人間が、いない？　え、でも、レフは……レフはどう!?」
『——レフ教授はあの爆発の中心で、レイシフトの指揮を執つていた。生存は絶望的だ。ただ、コフインに入つていたマスターたちに関しては何とか一命をとりとめることができました。それと……岸波ちゃん、コフインに凍結保存を命令したのは君だね？』

——その通りだ。

「……先輩、それは——それは、了承なしに行えば犯罪行為に当たります」

——そもそも承知の上だ。例え本人たちに非難されようと、見捨てるという選択肢が浮かんでこなかつた。それはきっと私に深く根付くあの選択肢が原因。だからだろう、マ

シユの口から犯罪行為だと伝えられようと、欠片も後悔なんてしていないのは。

「先輩……私は、先輩を攻めているわけではありません。寧ろその行動に、不謹慎ながら喜んでいる自分がいます」

『それは、僕も同じだよ。死んでさえいなければやり直せる。寧ろ、君にそんな役回りをさせてしまった自分が情けないよ……皆が起きたら、一緒に事情を話しに行こう。大丈夫、時間はかかるかもしれないけど、外部から応援が届けばすぐに治療を開始できる』
 「取りあえず、生きていればそれでいいわ。珍しくファインプレーね……でも、レフがないなんて。おまけにカルデアは機能の八割を失つてますって？ 取りあえず、レイシフトとシバの現状維持は絶対だから、そちらに人員を割くロマニの方針で問題ないとして……はあ。納得はいかないけど、私が戻るまでそちらは任せます』

——と、言うことはこちらは。

『ええ、その通り。特異点Fの調査を続行します』

『ち、チキンが進化した……？』

『帰つたらぶつ飛ばすわよ。レイシフトの修理に時間がかかるんでしょ？ 先ほどの戦闘で、マシユがいれば問題がないことは分かつたからこのまま進みます。……これより岸波白野、マシユ・キリエライトの両名は捜索員として調査を開始……異論はないわね』
 『ね、ねえ岸波ちゃん。なんだか所長、やたらタフになつてないかい？』

——激しく同意である。

「誰のせいだと思つてゐるの!? ほほ一般人がこうものほほんとしてるのに、一流である私が取り乱すわけにはいかないでしよう! いい、今回の搜索は異常事態の原因の発見!
解析や排除はカルデア復興後、第二陣を送り込んでからの話よ——いいわね!」

——あいさー!

『了解です。健闘を祈ります、お氣をつけて。岸波ちゃん、マシユも無理はしないこと。
緊急事態にはぜひ連絡を』

それを最後にドクターとの連絡は途切れる。

これからはいつでも連絡は取れるのだから、心配はいらない。

「いい? 何が何でも結果の一つや二つ出さないと、カルデアが協会の連中に取り上げられる可能性があるわ。そんなことになれば破滅よ。連中を黙らせるには明確な成果が必要なの。ギリギリまでは付き合つてもらうわよ——白野、マシユ」

——おお、何気に初めて所長に名前を呼ばれた。フルネームでなく、貴方とかでなく。「なんだか、先輩がやる気に満ちているような……呼び方ですか? 呼び方なんですか? ?」

「マシユ、落ち着きなさい。取りあえずは周囲の探索から始めます。いい、違和感でもなんでもいいから何か感じたら報告すること。貴方たちには違和感程度に見えても、私な

らそれが本当にただの違和感か否か判断できます。経験の差、実力の差ね」

ふふんと胸を張る所長。

その姿は確かに頼りになる——大人の背中だつた。

「では探索するにあたり、戦力を増強しましよう。幸い召喚サークルは設置できだし、新しいサーヴァントを召喚します」

新しい、サーヴァント……だと？

一体誰がマスターになるというのだろうか。私は既にマシユと契約しているし、所長はそもそも無理だし、マシユだつて今ではサーヴァントなのだからマスターにはなれない。となれば候補は限られてくるのだが……フオウなの？

「……そんな訳ないでしよう、貴方よ貴方。安心なさい、マシユは非常に低コストでほとんど貴方のリソースを奪つていないから。おかげでカルデアのバツクアップ無しでも一体くらいならサーヴァントを召喚しても問題はないわ」

そういいながら所長は先ほど設置した召喚サークルへと私を押し込む。
いやいや待つてほしい、本当に待つてほしい。そもそも召喚つてサークルあればできるほど単純なものなのだろうか。

本来ならば複雑な儀式なのだと聞いていたが。

「だから、それを改良したのがこの召喚サークルです。以前に説明したでしょう。この

サークルがあれば触媒を用いることでサーヴァントの召喚は可能よ。本当はもう少し複雑な過程を得てからサーヴァントは召喚されるけど、貴方に言つても分からぬだろうし」

——反論できねー。

「先輩……」

「さ、それじやあ始めるわよ。触媒はないから、聖晶石でも使いましょう……幸い、道中で拾つたものがあるわ」

——先生、質問です。

「……なんか薄気味悪いけど、まあいいわ。それでなに?」

——聖晶石ってなんですか。

「召喚サークルを開発した前所長が見つけてきた触媒の代用品のことよ。比較的よく落ちてるし、召喚に必要な魔力をある程度肩代わりしてくれる優れものよ。まあ使い捨てで狙いのサーヴァントを確実に呼べるわけじやないから万能ではないけれど」

成程、プレミアロールケーキか。

「成程、わかりやすい例えですね」

「ごめんなさい、私には理解できないのだけど……一々気にしてたらキリがないわね。さつさと始めましょう。……私はここに至り、『流す』という生き方を手に入れました」

所長がレベルアップしたらしい。

それはとても素晴らしいことである——特にそのテクは必須。まともに取り合つてたらコチラの身が持たないなんてことよくあるから。

「元凶は貴方だつて、直接言わないとわからないのかしら!? 早く召喚して、探索して、さつさと帰るの! これ以上貴方といたら致命的な何かが狂いそうだわ!」

ひ、ひどい言われようだ! 犯罪だ!

しかししさつさと帰るのには激しく同意するので召喚とやらをしてみよう。

何だかトゲトゲした虹色の石を四個受け取り、サークルの上に置く——と、何故

か後ろから視線。

「あの、先輩……私も、頑張りますので、新しい方が来ても、そのー、そのですね——?」

——ああ、新しく仲間になるサーヴァントと一緒にようろしく頼む。

召喚されるサーヴァントがどんなサーヴァントか分からぬ以上、最後の頼りはマシユなのだ。コチラに来てから長い時間を共にしたマシユは、私にとつて最も信頼ができる仲間で、次いで所長とドクターと職員のみんな。だからこそ、この状況下で最後に頼るのはきっとマシユだろう。

「はい——……はい、先輩。先輩の言葉一つで簡単に気分が高揚する自分が、単純で

少し恥ずかしいですが、悪くないのだと思います

ああ、身を少し縮めるマシユが可愛い。

たとえサーヴァントになつたとしても、やはり可愛い後輩は可愛い後輩であつた。

報酬に夜の時間をいただこう――――！（添い寝）

「わ、私でよければ喜んで。以前同様、サーヴァントになつてはいるものの全身の筋肉に変化はなく……はい、変わつていませんので」
つまりマシユマロですね？

幸せいっぽいのマシユマロなんだね？

よし――――早く終わらせて帰ろう。

「単純で結構。少しうらやましく見えてくるわ」

さて、それでは最後に私の魔力を流し込むことで召喚が開始される。

――『再開』

私を示す、起動ワード。

サークルに魔力が到達し、体を揺らすほどの風が巻き起こる。

特別な呪文なんていらない、ただこうして魔力を注ぎ願いを込めればいい。

――焼失していく人理を守りたい。

――共に過ごしたカルデアの皆を助けたい。

——何より、何度も頼りになる仲間たちに助けられたこの命、無駄に散らせるはずがない！

魔力の嵐が収束していく。

眩く目に焼き付く魔力の輝きは、一本の柱となつて空へと延びる。心のどこかで、期待もしていた。

昔の出来事、しかし今もなお色あせない、差し出されたその救いの手。

——剣を携えた男装の少女

——赤い外装に身を包んだ武人

——妖艶な半獣の女性

——黄金の輝きを持つ最古の王

私の手をつかんでくれた、その人は——

つてこれ、誰選んでも角立つじやんか！

選べないよ、これ選んじやいけない奴だよ。

もつと別の――よし、選択肢オールチエンジで。

「――ほう、この我に助けを求め、拳句の果てにチエンジだと？　は、随分と偉くなつたものだな白野よ。少々会わぬ間に、この我に払うべき敬意を忘れたか――よし、仕置きだな。この我が直々に駆けなおしてやろう。喜べ、仕置き道具の原点を味わわせてやる」

「またぬか金ぴか！　ここは余と奏者の感動的再会の一幕であろう！　危機的状況の奏者の前に颯爽と現れ敵を難ぎ払う余と、そんな余を見て奏者が頬を染め余に対する愛情を再確認するシーン……うむ、ミリオン余裕だな！」

「みこーん！　お待たせしましたご主人様！　はいよる良妻、タマモここに爆☆誕！　さあさ、その他大勢は放つておいて新婚生活の続きと参りましょう！　もう二度とあの女狐どもには邪魔させねー！」

「……なんというか、流石だな君は。気づけば、簡単に命を落とすような戦場に立つている。拳句の果てに周りに集まるのは誰もかれもが曲者ぞろい……まともなのは私くらいではないか？　私ならば君にそう心労をかけることもないとと思うのだが……？」

――ああ、懐かしい声が脳裏に響く。

知らず知らずのうちに、彼らとの契約の印であつた令呪へと手が触れる。

まあギルガメッシュに關しては例外で、ほぼ全部持つてかれた上に渡されたのはギルガメッッシュが保有していた令呪だつたが。

と、まあそれはおいておいて。

この状況はいかがなものか。

なんか目の前の魔力の柱が荒ぶつて、超荒ぶつて。

それはもう何か巨大な塊が内側から外に出ようと争つてているかのように荒ぶつてらっしゃる。

「セイバーさんと金ぴかさんが争つてゐる内に失礼しますね。油揚げを搔つ攫うは狐の仕事……NTRとかやらせません！　さあ抱きとめてくださいまし『ご主人様』——つて、何ですかこの鎖！　私のご主人様専用悩殺ボディーに絡みついて!?」

「ほざけ獸畜生が！　貴様に欲情する日が来ればその日こそこの世も終わりよ。獸は黙つて野生か檻へと帰るが良い！　それにしても、相も変わらずこの我を愉しませる人生を送つてゐるものよ。此度も存分に足搔き、この我を愉しませよ。さすれば、そうさな。前回はこの世の愉悦を教えてやつた……では貴様には、この我自らがこの世のありとあらゆる快樂をくれてや——む、なんだこの粗末な布は。どこかで見覚えが……身体が、動かんだと!?」

「英雄王、流石に聞き捨てならんぞ。君も気苦労が絶えないな、マスター。まあ安心して

くれ、ああいつた手合いの者から君を守るのも私の役目だ。力不足ではあると思うが、ここは私を召喚して場を収めてしまうのも一手だと思うぞ。……失礼、少し待つていてくれ。どうしたのかね、セイバー。取りあえず、剣を收めないか?」

「ぐぬぬ、アーチャー貴様、赤いだけでなく余のポジションまで奪おうというのか! 奏者の剣は余が務め、奏者の嫁も余が務め、奏者の夫も余が務め! 取り合えず一番の障害はさっさと沈むがよい、うん、それがいい。赤は二人もいらぬ」

なんというカオス。

案の定こうなつてしまつたか――!

というか私、靈媒なんて一つも用意してないのにどうして皆がやつて來たのか。
逆か、逆に私がサークされたのか!

ということはこの後いくら召喚する機会があろうと現れるのはあの四人に限られるのか。いやまあ別に嫌じやない、むしろ嬉しいのだが新しい出会いというものにも少し期待があつたりなかつたり……いや、やめよう。下手するとヤンデレ一派が現れたときガチで監禁されかねない。

うん、出会いとかもうおなか一杯かな!

何だかガヤガヤと念話が脳裏に響いているが、もうカオスすぎて訳が分からぬ。
誰がやつてくるのか――安定ならアーチャーなのだが、リア充爆ぜるべしと悟つ

た一件もあつたところだし迷いどころ。キヤスターはとても甲斐甲斐しく可愛らしいのだが、一度暴走し始めると世界を巻き込む規模で事件が起きる。となるとセイバーか。可愛いし、甘えられると離せなくなる……突拍子のない想像を超えた行動力は困りものではあるが。

ならば——英雄王か。

ない、それは、ない。

確かに心強いのだが——彼は不味い。共にムーンセルを飛びだし、似た環境の場所へと乗り込み共に過ごした。三日後には征服完了。朝起きてギルガメツシユがいいからどうしたのかと外を見たら黄金の玉座を人々に担がせ、その上で尊大に笑う彼がいた。訳が分からなかつた。

ギルガメツシユの行動は、常人である私には予測なんてできはしないのだ。
だからもう、

——AUO以外なら誰が来てくれても大歓迎です。

「ふはははは！ 雜種どもめ、この我を出し抜こうなど片腹痛いわ！ 精々貴様らは負け犬のことく、そこから我を見上げているがいい。そもそも、打ち捨てられたこの娘を

もらい受けたのはこの我だ。この世全ての一部ならば、それはつまり我のものよ！さあ白野よ、その生きざまその続き、この我に示すが良い！ 我の満足度——AUOポイントによつて褒美を取らす。最高位は純正ダイヤにも勝る我が裸体よ！」

——はい、フラグでした！

だよね、そうなるよね、あの王様を止められるわけがないよね！

「そう喜ぶな、白野よ。ふむ、その態度に免じ先ほどの仕置きは見送りとしよう。ゆめゆめ忘れるな、貴様は我的物であり我の者である。であればこそ、我を称え奉るが当然であり世の理よ。次は無いと胸に刻み、その歩みを以て我を興じさせよ。さあ、我らが旅の続きをとゆくぞ！」

魔力の渦より聞こえるは、耳をふさいでいても通るだろう王の声。

ああやつぱりこうなつたかと苦笑いしながらも、次の瞬間にはきつと私の表情はだらしのないものになつていただろう。

眩い黄金。

堂々たるその姿。

圧倒的なその存在感に、懐かしさを感じ安堵する。

まさか再度力を貸してくれるとは夢にも思わなかつた。

「ふん、言つたであろう。貴様に愉悦は教えたが、今だ足りぬものが多くあると。我的マスターたるもの、我に及ばぬは当然として求められる格がある。我的右腕という、本来なら身に余る場に貴様はいるのだ。であれば裁定者たる我的右腕は、我が裁定する世界を存続させる義務がある」

——な、なんという無茶ぶり！

「無茶だと？ 貴様は一度、神を破り願いを叶えたであろう。未熟故、我が手を貸してやつたとしても眞実は変わらん。そして此度も貴様の未熟は変わりはせん。そも、完成された存在は天上天下にただ一人であるからな」

だから、力を貸してくれるというのか。

未熟な私が世界を救うために、完成された英雄の王が？

というか、何気にその立ち位置の話は初めて聞いた気がする……！

「我が今、ここで決めた。貴様はどうも、こう、地に足がつかん。放つておけば勝手に藏から飛び出しこに行くか想像もつかん。ならば————我が直々に手綱を引いてやればよいと考え至つた。これ以上の良案は他にあるまい。そら、称えよ」

その思い付きで世界救うことになつたのか、私は！

「当然よ。無論、無様をさらせば直々に仕置きしてやる。殺さず、やり直す機会を与えてやるのだ。この我にしてはあまりに慈悲深いとは思わんか。まあ、仕置きにかんしては

手加減はせんが。我に仕える悦びというものを教えてやる」

いやまあそもそもその話、こうして特異点と人理焼却は止めようと思つてたけど、ギルガメツシユに言われるとなんだか規模が違つて見える。これは何が何でも人理の焼却を防がないと、どんな目にあわされるのか想像もつかない……！

彼はやると言つたらやる、間違いなくやる！

「ふはははは！ よく理解しているではないか、白野。そら、手始めにこの特異点とやらを見事に治めて見せよ」

腕を組み、そういう黄金の王。

ただその無茶ぶりは懐かしく、自然と心の内が満たされていく。

その無茶ぶりが、信頼の裏返しだと分かつてしまつては断れない。

——ギルガメツシユが力を貸してくれるなら、出来ないことなんてきつとない。

その日、私は再び月の裏で出会つた破格のサーヴァントと契約を結びなおした。

その後、何気なく地面を見てみると三枚の手紙が。

『今日は金ぴかにしてやられたが、次は余の番だ！　余は既に準備万端、いつでも奏者の呼び声に応えよう……いつでもと言つたが、なるべく、いや、可能な限り早くせよ。拗ねるぞ、遅いと余が拗ねるからな！　拗ねたら一週間は余と寝食を共にするのだぞ！』『ご主人様と会えるせつかくの機会が――！　流石は最古のジャイアニスト、あそこでアーチャーさん妨害のため、マグダラから解放しなければ……！　よよよ、タマモちゃん反省。――と、言うわけで私正座をして肅々とお待ちしております。ですので、私の脚が痺れてしまう前にお呼びくださいまし！　あ、部屋はご主人様と同じで結構でござります。というか、それ以外は認めね――！』

『すまない、マスター。私の力が至らぬばかりに、最も厄介な者を行かせてしまった。この失敗は、召喚され次第すぐに取り返す。恐らくあの英雄王と対抗できるとすれば、相性的に私くらいのものだろう。故に、手遅れになる前に呼んでほしい。それと、生活習慣には気を付けたまえ。君は放つておくと――クドクド』

「なに、なんなの、本当になんなのよ！　英靈つてこんなのがつかなの？　まともだつたのは二号だけか――！」

「ああ、落ち着いてください所長！　私も混乱していますが、今の所長を見ていると落ち着かなくてはと使命感が！」

取りあえず、この場を収めてから世界を救おう。

九話

現在、私は所長たちと顔を突き合わせてコソコソと話をしていた。

だつて、プライドの高い所長を何も知らないままギルガメッシュと対面させたら首
ちよんぱされてしまいそうだし。下手なことを起こすとホントにギルガメッシュの機
嫌を損ねかねない。口を慎め雑種、王の前だぞと言い出したらアウト。

というか、もう限界。

——取りあえず、正座はもういいですか？

「ダメに決まっているでしょう！　ああ、もう、並行世界、月の聖杯戦争、そして最古の
英雄王！？　どうして並行世界の住人がこつちに来てるのか、なんで月で聖杯戦争が起
こつてるのかとか色々聞きたいことはあるんだけど！？」

いや、そこんところよく分かつてなくて。

気づいたらいつも通り知らないところにいて、命の危機にあつて。
まあ大分いつもの事と化しているので私的には問題ないかなって。

「大あり、大ありよ！　というか貴方、記憶喪失って嘘ついてたわね!?」
いやいや、嘘ではない。

実際に、こうして並行世界に飛ばされる直前の記憶はない。何があつて私がここにいるのか、何のために私がここにいるのか、一体誰の仕業なのか、これらに關して私が知っていることは一切ないのである。

「どうか、まあ、私——記憶喪失とは言つてない。

「……はっ！　そう言えばそうでした！」

「……じゃあなに、並行世界からきた為、こっちの常識を知らないから記憶が無いと勘違
いした挙句、アムネジアの痕跡が見つかつたから記憶喪失つて？　ええ、理解したわ——
——全部あの馬鹿のせいね！　まあハツキリ訂正しなかつた貴方も同罪だけれど！」

いや、ちよつと、ちよつとだけ言い訳させてほしい。

正直に言えば私の記憶は失われてこそいいが、混雑というか、混乱はしているのだ。
本来有るはずのない記憶が四つあり、それこそ並行世界の記憶が私一つにのしかかつ
てるみたいな！

「意味がよく分からぬけど、要は自分が選んだ選択肢とは別の選択肢を選んだ時の記
憶があるってこと？」

おお、流石は所長。

言いえて妙、というかまさにその通り。

「言つておくけど、褒めても許しはしないわよ？」とは言え、貴方を問いただしたところでこれ以上は何も分かりそうにはないし……かの英雄王なら何か知つてゐるんじやなくて？」

うーん、多分何か知つてゐるというか察してはいると思う。

ぶつちやけ性格こそあれで慢心の塊だが、それは知つてゐるからこそその慢心だ。

彼の洞察力はまさに王そのものなのだ。

——そしてその態度も傲岸不遜。

「……何が言いたいの？」

要するに、あの王様はもつたいぶつて教えてくれない。

もしくは私自身が察するまではヒントを小出ししてくれる程度だろう。

「話を聞く限り、本当にあの英雄王のことをよく知つてゐるみたいね。まあ、召喚時の会話から分かつてゐることではあつたけど、並行世界の移動なんて生きている内に見ることがあるなんて……もう何があつても驚かないわ、私」

「そういえば先輩。記憶喪失ではないということは、魔術の記憶もあつたのでは？　先輩が魔術を知らないということから、ドクターは記憶喪失ではと勘違いしたわけですし。はい、私もですが」

それに関しては本当である。

私がいた世界では、すでに神秘は薄れてしまったため現実世界で魔術を使えるのはほんの一部だけだったのだ。そして当然ながら私はその一部に入つてなどいなかつた。だから私は魔術なんて知らないし使えるなんてこともなかつた。

例外として、月での聖杯戦争ではコードキヤストという魔術の代替品のようなものが使えたが、それも用意された礼装に記録されているもの限定だった。まあそれがまた何でか魔術刻印としてこの体に刻まれているのだ。

「成程……あ、申し訳ありません先輩。もう一つ、確認したいことがあります」

もうこの際だから何でも聞いてほしい。

多分、聞かれないと、まあ大丈夫だろうと勝手に判断して自己完結してしまうことがよくあると思う。

何気に、サーヴァントの仲間以外と戦場に出るのとか初めてだからつい忘れてしまうのだ。彼らとは不思議なことに意思の疎通がいつの間にかできていたし、もはやツーカーだつたし。あ、ギルガメッシュは一方通行ね。無論、ギルガメッシュが何を考えているのか察するのが私。

「では遠慮なく。……先輩、これ以上の隠し事はありませんか？」

……おつとマシユ、顔が近いぞう。

大丈夫、逃げないからその手は一旦放してください。それにこれ以上に隠していることなんてない。まあ私が自覚していないだけかも知れないが、それこそ私が意図して伝えてないことはもうないと断言できる。

「わかりました、先輩を信じます……実は、少し不安でした。ギルガメッシユさん——英雄王と言葉を交わす先輩が、とても手の届かない遠くにいるようで……」

マシユの手に、ほんの少し力が加わった。

そんなにも私の様子が違つたというのだろうか。

「そりやあ貴方ね、過去の英雄と何故か親しげに話していれば知らない方からすれば異様にしか見えないわよ」

もう、そういうものか。

ならば私がやることは一つ——変わらぬことを証明するほかあるまい。
だから私は声高々に叫ぼう。

——私は、可愛い後輩が大好きだ——！

「せ、先輩!？」

——後輩のましゆまろボディが大好きだ——！

「あ、あの先輩!! は、恥ずかしいので——」

——鰐化してから露出されたおなかも好きだ！ ただし眼鏡は返せ！

「あうつ!? す、すみません、すみませんでした先輩！ 何一つ変わらぬ愛情をありがとうございます！ ですのでそろそろお口チヤックを————！」

うむ、わかつてもらえたのなら何よりだ。

「ふはははは！ 何を喚いているのかと思えば、ついに頭が逝ったか！ だが良し！ お前は少し欲に對して素直になるべきであつたからな。白野に影響を及ぼすとなれば——未熟者であるデミ程度でも存在価値があるというものよ」

「は、はい、英雄王！ 未熟な私ではあります、先輩を守り抜く所存です！」

「ふむ、まあ未熟ではあるが見る目はある。いい従者を見つけたではないか白野よ。これで私も少しは自由にやれるというものよ」

確かにそうかもしれない。

今今までギルガメッシュには、私という重しがあつたのだ。そりやあ自由に戦うこともままならなかつただろう。だが、今はマシユというデイフェンスの達人がいるのだからギルガメッシュの火力が全て前面に回せる。

「思いあがるなよ白野。貴様を守りながらの戦いが、我にとつて重しであつただと？ ハ、我は王だぞ？ 国一つを懷に収めるのに比べれば貴様一人どうということはない」

——と、このように実はいい王様なのである。

「そのようなこと、言わざとも分かつて いたことであらう」

「流石です、先輩。今の一連の流れでよく分かりました」

——ただ、調子に乗るとお仕置きされる。

「……調子に乗れる先輩を尊敬してしまいます、本当に。そのメンタル強度、もはや宝具の域ではないかと疑つてしまひます」

「もし何かの間違いでサーヴァントになることがあればきっとそうでしょうね。私も認めるところよ、呆れながらね」

呆れたような視線を背に、私はいつの間にか近くに来ていたギルガメッシュと相対する。

相変わらず黄金の鎧をまとつたその姿は眩く輝かしい。この地獄の中でも、彼の周囲だけは彼の色に染め上げられている。

そんな彼が私を見下ろしながら、とある一方向に視線を送つた。

「いい加減、変わり映えせんこの場も飽きてきた。それに向こうもそろそろ動くころだろうよ、白野」

飽きてきたとか、相変わらずである。

というか、向こうもそろそろ動くことは一体どういうことなのか。

「……まさかとは思つていたが、貴様衰えたな？ 元々みすぼらしい回路がマシになつ

て来たと思つた矢先にこれか。だが良しとしよう。この地獄を抜けたころには見てく
れだけは整うだろうよ。おまけに他のサーヴァント共と共に鍛え上げたソレではない
のはポイントが高いぞ?」

えつと、それはつまりセイバーたち三人とそれぞれ戦い抜いた結果出来上がつたスー
パー白野ではなくて良かつたということだろうか。ちなみに、そのスーパー白野状態
だつたら私はどうなつていたというか何をされていたのだろうか。

「決まつている。我のものが雑種ごときに染められたのなら、この我自ら染め直すしか
あるまい。幸いここに、かつてこの身に浴びたことのある醜い泥がある。これでも飲ま
せればあらかたの痕跡は消えようよ。まあ安心しろ。我との記憶くらいならば保証し
てやる。それ以外は知らん」

そういうながら彼の蔵から取り出されたのは一つの杯。

同時にその杯から漂う気配に、どこか身に覚えというか似たものを知つているような
感覚を抱く。それを見ていたギルガメッシュは面白そうに鼻を鳴らし、その杯を自らの
蔵に押し込めていった。

「我としては、貴様が我以外をサーヴァントとした記憶の全てを消してしまいたいとは
思つていたが……まあいい。考へても見れば、恐らく此度の戦いもまた貴様にとつて厳
しいものとなろう。アレら雑種との記憶の中に役に立つものもあるやもしれん。事が

済んでから消せばいいことよな」

——この英雄王、ついに私の人権否定しやがった！

「モノに人権も何もあるまい？ しいていうなら、我が法だ」

ごらんのありさまである。

これこそが世界最古の英雄王にして世界最古のジャイアニスト。

まあ取りあえずはすべて終わつてから考えよう。

「先輩!? 思考を放り投げてすべて後回しにした気配があるので！」

いいの、これでいいの。

そのウチ忘れてくれる——そう信じよう。

「こうやつて、先輩の鋼鉄のメンタルは完成していったのですね……納得です」

「納得しちゃうのね。いえ、私もちよつと納得してるんだけど」

「む、貴様、そうお前だ女。白野よ、どこかで似たような女と会つたことはなかつたか？」

ふむ、所長と似た人か。

それはきつとプライドが高くて強気、でもちよつと抜けてるところがあるツンデレ。

——あの小娘か

うん、その小娘だ——胸の事じやないよ！

聞かれてたらガンド間違いなしだから言い訳はしておく。

全てはあの英雄王が悪いんだ。

「成程……まあ、貴様の同行も許そう。あのタイプの人間は思わぬところで役に立つからな」

ああ、これで一つの懸念事項がなくなった。

これで全員一緒に行動を共にできる——って、あれ、何か忘れている
ような。

「先輩。恐らくは、向こうも動き出す、といつた英雄王の言葉に関してだつたと思いま
す」

そうだ、そうだつた！

あまりに私の人権を否定する発言に、疑問がすつとんてしまつた！

「何、向こうと言えばこの状況下では一つしかあるまい——敵襲だ」

その言葉と同時に、ドクターから緊急コール。

『みんな、急いでその場を離れるんだ！ 敵性反応がすごい速度で向かつてゐ——
——つて、あれ、見慣れぬまぶしい人がいるけどどちら様で？』

「ドクター、説明はあとで！ 無礼はダメです、絶対に！」

下手すると剣山になるから気を付けて。

『なにそれ怖い。つて、兎に角今はその場から————！』

「よし白野よ。コチラに来てから初めての実戦だ——我を失望させるなよ！」

『あ、だめだ人の話を聞いてくれないタイプの人だ！　いいかい、向かってきている反応は今までの敵とは比にならないほどに強力だ！　恐らくはサーヴァントクラスの化け物がやつてくるぞ!?』

——サーヴァント、だつて？

いや、でも、サーヴァントが召喚されることなんてありえるのか？

それこそ私たちのように独自の召喚術を行える組織か、もしくは聖杯戦争——聖杯戦争？

「その通りだ、白野。まあ正確には召喚された拳銃、無様に泥に飲み込まれた雑種に過ぎん。貴様が戦い下してきた英靈とはまた格が違う——我と貴様なら相手にもなんらん」

『え、ちょっと待つて!?　岸波ちゃんにサーヴァントとの戦闘経験？　一体、何を言つて……』

「口マニ、貴方にはちょっとお話があります。帰つたらその場で待機——逃げないことね」

『あれ、所長が激おこなんだけど、僕なにかしたつけ!?』
慌てるドクターに心の中で謝りつつ————目の前に音もたてずに降り立つた黒い

影へと視線を向ける。

先ほどまでの敵とは比べ物にならないほどの魔力の凝縮体。

そして、狂気に飲まれながらも向かつてくるその意志ある行動。

マシユが体を震わせ、所長が顔を青くする中——ふと、比較している自分がいた。

——ああ、あれは……違う。

「それでこそ我的マスターだ。恐れることなどあるまい？ そもそも、敵が何であれこの我が貴様に力を貸すのだ。醜き神すら殺す我の力——存分に振るうがいい！」

敵はサーヴァントで、意志こそあれど思考なんてできていない。

私が戦つてきた彼らは自らの意志を持ち、人としての思考を駆使し、人に称えられ奉られた英雄として力をふるつていた。そんな彼らに比べれば、ただ力をふるうだけのサーヴァントに満たない存在なんて怖くない。

——私一人でなければな！

「ええい、それが余計だというのがなぜ分からんか！ まあいい、見ているがいいそこのデミ・サーヴァント。これが真の英雄、真の王の戦い方よ！」

ギルガメッシュの背後、その空間が揺らぐ。

そこから姿を現すのは、神秘の具現。

本来、英雄が自らの生涯の中で成し遂げた偉業、その集大成。

それを惜しげもなく両の手を超えるほどに展開させる。

マシユ、これが世界最古の英雄だ。

世界全てを一度手に収め、人の作り出す宝の全てを自らの蔵に封印した王の偉業の具現。

故に彼はその蔵の中にこの世の全てともいえる宝具の原典を所持している。

「さて、ではいくぞ？ 我もいささか、狐のいう逆サーキとやらのせいで力を削ぎ落としてきた……見事に補えよ、白野！」

――そういうことは早く言え――！

「ははは、反省はしていない。そら、来るぞ。デミ・サーヴァント、貴様もせいぜい白野に見限られぬよう働くがいい！」

「勿論です。先輩に見捨てられた私は、鼻をかんだ後のティツシユに同じ！ 全力で先輩を守ります！」

「で、私は相変わらず放置されると……いいわ、もう、慣れちゃつた」

――大丈夫、所長は私が全力で守るから。

「そんなこと言つて、絆されると思わないことね！ あ、でも本当に耐久やらかけてくれ

るの……そう

その後、僅か二分足らずで戦闘は終了した。

たつた一騎のサーヴァントがギルガメッシュを前に二分も持つたとなれば相当なものなのだが実際は違う。その後も何かにつられるように現れたサーヴァントが二騎もあり、それをギルガメッシュとマシューで殲滅して、かかつた時間が二分。

攻撃力上昇の魔術を重ね掛けしたギルガメッシュの無双っぷりはやばかった。
そして、

「つたく、こいつはどういう状況だ？　アイツらが走り出していくから何事かと追いかけてみれば……こりやあ助太刀なんていらなかつたか」

聞き覚えのある軽快な声。

かつてのライバルが従えた、英雄の声だ。

「ま、やるじやねえか嬢ちゃんたち——つて……おいおい、見たことがあるような気がしたが、どうもどこかで縁があつたマスターか？」

私たちは、かつての敵と再会した。

十話

目の前に立つ、フードを被つた一人の男。

私は間違ひなく、彼という男を——英靈を知つてゐる！

「ああ、思い出したぜ。あのすかしたアーチャーのマスターか……んで、何の因果かこの英雄王のマスターでもあると。なあ嬢ちゃん、もしかしてアンタお仲間か？」
え、あの……え。

その不憫な人を見る目は一体なに。

というか、やつぱり貴方はあの時、凛と組んでいたサーヴァント——クーフーリンなのか。

「おうよ。まあ本来なら真名をばらすのはご法度だが、嬢ちゃんたちなら問題ない。ただ、俺は嬢ちゃんの知るランサーじゃなくて、今回はキヤスターだけどな」

ああ、なるほど。

だから今回はとつてもまともな恰好をしているのか。

「…………な、なんか聞き捨てならないことを聞いた気がするが、まあいい。つて、なあ嬢ちゃん、悪いんだけどよ……そこの殺す気満々の英雄王を止めちゃあくれねえか？ 今の俺じやあまず瞬殺されちまうからよ」

「我は犬は好かん。特に青い犬はな……見ている分には非常に愉悦だが」

ギルガメッシュの殺氣は収まらない。

というかこの感じ、ギルガメッシュもランサーじゃなかつた、キヤスターと知り合いだつたのか。

しかし出典は別のはずだから、これまた可能性があるとすれば、

「そうだ。我ではない我が、また別の聖杯戦争でこやつと共に召喚されていた。まあ実際は少し違うのだが……結果的に我自らが手を下した時もある」

そういうことか。

だからこうやって殺意満々で背後の空間を揺らしているわけか——いややめて
ください。

せつかく仲間になりたそうにこつちを見てるのに殺すことはないでしよう！
「いや間違つちやいねえがなんだ、いや、いい」

何だか諦めたようにキヤスターが肩をすくめる。

その光景に首をかしげながら、とりあえず先ほどから私の背中をつつく所長へと振り返る。

「……無視されてるのかと思ったわ。ねえ、貴方まさか、あのキヤスターとまで知り合いなの？　いきなり真名当てるし、もしかして月の聖杯戦争とやらの相手だつたのかしら？」

その通りである。

半神半人のケルトにおける大英雄であり、因果逆転の必殺の槍を持つランサーだつた男。

今はキヤスターとして召喚されているようだが、人となりは真に英雄のものだ。

簡単に言うと、口は悪いけど面倒見のいいお兄さん。

「なるほど。先輩の翻訳はとても分かりやすくて為になります」「俗物じみてるつていいなさい。いえ、おかげで分かりやすいんだけどまあ俗物だからね。

平凡なクラスから三番目の女子高生だからね。

「で、どうする白野。この犬は今すぐ挽肉にし、そこいらの怨霊にでも喰わせるか？」
「テメエはどうしてそう物騒な発想しかできねえんだ!?　こつちに敵対の意志はねえよ

！ ちよいと面倒な事態で俺一人じやあ手におえねえから、こうやつて出てきたんだろ
うが！ 俺は事情を説明する、お前らはなんでこの町がこうなつたかを知る、悪い条件
じやねえだろ？」

「ふん、大方すべての原因は大聖杯だろう。あの雑種共が泥に反応し群がつてきたのが
その証拠よ」

泥に群がつて来た？

この中に泥なんてものを持つている人はいないはずだが――まさか。

「先ほど見せてやつたであろう。あの泥もまた汚染された聖杯からあふれ出た、聖杯の
一部だ。目敏くも聖杯の気配を嗅ぎ付け、愚かにも誘われた雑種共を見ればすぐに分か
ろう」

あれか――――！

あれ聖杯の一部か、なんてものを飲ませようとしているのだこの英雄王は！

おまけに汚染されてるとか、完全に私の事を変なので上書きしようとしたな！？

「問題などない。あの程度の泥、貴様が飲み干せんはずもない。セイヴ・アーの光を退け、
『この世全ての欲』を退けた貴様には害にもならん。あれで『この世全ての悪』だという
のだから傑作よな」

ああ、もう、こういう人だつたけど、こういう人だつたけど！

なんだかどんどんハードルが上がり、同時に命にかかる危険度も倍。ブツシユだよ。
——というか大聖杯ってなんぞ？

「この聖杯戦争には二つの聖杯があった。人形に埋め込まれた小聖杯、そして大本たる大聖杯とな。それぞれが持つ役目など、今となつては何の意味もあるまい。ただ大聖杯さえ破壊してしまえば全て終わると知つていればよい」

じやあ大聖杯壊せば終わりか。

ならば私たちの目標はその大聖杯の元へと向かい破壊することとなるわけだ。
まったく、知つていたならもつたいぶらず早く教えてくれればいいものを。

「あの、先輩。突つ込みどころは他にもあると思うのですが……」

いいんだ、なんでそんなものの泥を持つてているのかなんて大した問題じやない。

この世の宝を蔵に収めた英雄王は何を持つていてもおかしくはないのだ。

——いいね？

「あ、はい」

マシユが反射的にうなずく。

それを見届けた後、どうやつてギルガメツシユにキャスターの同行を許してもらうか
を考える。

何か、何かギルガメツシユが納得するような利点はないだろうか。

純粹に手数が増えるのはいいとして、それ以外は大抵ギルガメツシユ一人でカバーできてしまうのが痛い。

いや実際には素晴らしいことなのだが、こういう時には困ったものである。

「何を悩む必要がある。大方そこの犬はこの元凶たる大聖杯の場所を知っているのだろうが、それは私も知りえることだ。精々、どのようなサーヴァントが召喚されていたのか聞き出してしまえばもう用などあるまい?」

「……今決めたぜ、絶対に敵サーヴァントの情報は明かさねえ」

素晴らしい判断だと思う。

私は全面的に応援しよう——形だけな!

「清々しいな、というか開き直つたな!? 昔の嬢ちゃんはまだ初々しいガキだったつてのに……まだこっちのデミ・サーヴァントの方が初々しいぜ?」

何度も死にかければこうなる。

一つの事に執着するのもいいが、ただそれだけを見ていては何かを見落とすのだ。

そう、例えば今のように——

——マシユのマシユマロは私の物だ——!

光る骨子でできた守り刀を片手に魔術、h a c k (16) を発動。

その光は、マシユを初々しいとか言いつつそのお尻に手を伸ばすセクハラサーヴアン

トに向かう。

「うお!? ちよ、今の俺は対魔力ねえんだから勘弁しろよ!」

——マシユに手を出そうとするからだ。というか避けるな。

「表情変えずに言われてもな……躊躇もなくなつてやがる。愛されてるな、デミの嬢ちゃん」

マシユの頬が赤く染まるのが初々しい。

その表情が見れただけで私のMPは大幅に回復した——気がする。

本当ならあそこでギルガメッシュユを差し向けて消滅させてしまおうかとも思ったのだが、私はそこまでキチつてないのだ。気に入らないから取りあえずぶつ殺してしまおうでは、今まで出会つたおかしな人たちとなんら変わりないのだから。

「……すまん嬢ちゃん。称賛するぜ、いやホント。そつちに入らず手前で踏みとどまるその精神力は恐れ入る」

私がそつちに入つたら終わりだと思ってる。

止めてくれそうなの、アーチャーしかいなそудだし。

まあ取りあえずその話はここまでとしよう。いい加減ギルガメッシュユをどうにかせねば。

ねえキヤスター、何か自分にしかできないことってないの。

「面接が始まりやがったよ。いやまあ、今の俺にできることと言えばルーン魔術くらいのもんなんだがよ…………と、そうだデミの嬢ちゃん。ちよいと聞きたいことがあるんだが、嬢ちゃんはその宝具は使えるのか？」

するとマシユ、ピクリと体を揺らして申し訳なさそうに口を開く。

「すみません先輩。黙つているつもりはなかつたのですが、私は現在、この宝具を使用することができません。そもそも元の英靈の真名も分からぬいため、この宝具の名を分からず……」

「まあそんなこつたろうと思つたぜ。デミの嬢ちゃんにすべてを託したその英靈が何を考えてんのかは知らねえが、丁度いい。デミの嬢ちゃんが宝具を使えるよう、俺が稽古をつけてやるよ。そこの英雄王じや加減が効かねえだろ？」

ちらりとキヤスターがギルガメッシュを見る。

するとギルガメッシュは意外なことに顎に手を当てどうやら思案気味。

キヤスターがそれを肯定と取つたのか、何故か所長に近づいて行つた。

「所長つてこたあ、まあ指揮官みたいなもんだよな？ 本当なら嬢ちゃんにルーンを刻みたいところだが、んなことすりやあ針山にされちまうからよ。じやあ次に優先度の高いアンタに刻んでおこうつてな。よし、厄寄せ完了」

「…………え、え？ なにしてるの、何してるの？ なんで私のコートに禍々しいルーン

刻んでるの？」

「安心しろ、アンタならまあ襲われても自力で何とかなる程度の腕前はあるだろ？　あのデミの嬢ちゃんの頑張りに期待しな、そうすりや早く済むだろ」

愕然。

そんな二文字がよく似合う所長の表情を見て、ギルガメツシユがニヤリと笑う。

あ、これはアレだ、愉悦を見つけてしまったときの悪い顔だ。人の泥くさい足掻きを見て楽しもうとしているのだ。

「良し、許すぞ。精々我を愉しませよ。結果次第では犬、貴様の現界を認めてやろうではないか。ふはははは！」

「相変わらず歪んでやがんなア…………まあそういうこと何で頑張つてくれや」「いいいい、意味が分からぬんですけど——!?」

「ああ、魑魅魍魎の類が、街灯に誘われる虫のように——!?」

「よしよし、こんだけ集まれば十分だろ。修行における鉄則にこうあるだろ——理性を捨てろつて」

「ないわよ。」

あつたとしてもなんで巻き込まれるの私、そう叫ぶ所長が可愛そうになってきた。

「いやいや、やつてみりや分かる。俺も昔はこうやつてギリギリまで追い込まれ、気づいたらこのザマだ。なんか修行の途中から記憶がなくなつてやがんだが、はつと気づけばこれ俺死ぬんじやねつて修行も終わつててな。実体験があるから安心だろ?」「英雄と一緒にしないでくれる!? いやマシユは英雄だけど、デミだけど!」「……? ジヤあ問題なくねえか? 修行すんのデミの嬢ちゃんだし」

「」

言葉を失つた所長の目が濁つている。

ああもうこれ、いつぞやの私を思い出して切なくなつてくる。

——大丈夫、私も付き合うから。

「……一番まともなのは、やつぱり人なのね」

ほろりと涙を流す所長を見て、なんだか私も悲しくなつた。

心が痛いとかじやなく、なんて的を射た発言なんだろうと実感して。

「取りあえず、ケルトは信じちゃだめね。あの戦闘用スース、帰つたら仕様変更させてやるわ」

円卓もね。

あそこバケモノの巣窟だから。

と、所長所長、進展があつたようだ。

「もしかしてもう使用できるようになつたの？」

いや、なんだか敵が増量してマシユを素通りするのがちらほらと。

要はヘイトUP的な、盾より視線集めちゃつてる的な。

「いや―――!? コートね、コートを脱げばいいのね!? かかつたお金より命よ!

私はそれを今ここで学んだわ！」

所長、コート貫通して刻まれてる。

それはもう禍々しいのが所長の背中に。

脱ぐの、それも脱いじやうの?

「何をワクワクしているの!? 脱ぐはずがないでしよう!? というかなんでアナタは余裕なの!?!」

だつて、ギルガメツシユがいるし。

ふはははは、こんな雑魚どもはギルガメツシユがいれば敵ではない―――いれば。

左を見る、右を見る、前に後ろに、金ぴかはいない……うん?

あれギルガメツシユどこー?

「はははは！ 良いぞ、その生き汚い足搔きは見物である。どうした白野、その程度の雑魚、敵ではないのだろう。ほれ、我はここにいるぞ―――手は貸さんがな！ うむ、その上がつて落ちる愕然とした表情が見たかつた。いつみてもそそる表情よな！」

廃ビルの上、私では到底届かないその頂上に彼はいた。

それはもう何かに満たされているかのような輝かしい笑顔で。

「英雄王には貴方の鉄仮面も読み取れるのね……元気出しなさい」

反射的にヒシツと所長に抱き着く。

これが大人か、大人の抱擁感か……泣ける。

ごめんよ、頼りないなんてこっそり思つててごめんよ！

やつぱり所長はこの場におけるただ一人の大人だよー！

『あ、あれ、僕も大人の枠だと思うんだけど……というか、僕の知らない間に何があつたの』

「せせせ先輩!? 所長が少しというかうらやましいというかああでもそんな余裕もなくなつてきてますが取りあえず終わつたら私にもなにかご褒美をーー！」

その後、ギルガメッシュはマシユが宝具を発動させるその時まで、一切手を貸してくれなかつた。

同時に私はキヤスターの言が正しかつた事を知る——だつて気づいたら終わつ

てたんだもの。

この時私は心に誓つた。

ケルトとは関わらないようにしよう、と。

十一話

さて、マシユの宝具が発動できるようになつて数時間後。

私たちは休憩しながらも仲間となつたキヤスターからあらかたの流れと情報を得ることができた。

本来ならあまりのんびりしていられる時間はないと思つてはいたのだが珍しくギルガメッシユが、

「どうせ最後に待ち構えているのはセイバーであろう。奴の事だ、ただ聖杯の前に立つだけで使おうとは思つていまい。まあ、泥に汚染されていない元来のセイバーであれば分からんがな。あれは愚かで哀れ、それでいて美しい女だつた。別の我が見初めるほどにはな」

そんなギルガメッシユの発言に驚きつつも、次の瞬間にはこの王様ならあり得る話かと納得してしまう。

だつて愉悦大好きなこの王様だ、そのセイバーが必死になつて聖杯を手に入れようと
あがく様を見て、これは我のものにしようと思い至つてもおかしくはない。と、ここで
何故かニヤニヤとギルガメッシュが私を見下ろしてくる。

「いや、まあ愚かですよ、私も……。」

「……先輩先輩、きっと英雄王の望む反応はソッチではなくですね」「デミ、口を閉じよ。白野め、もう少し我の偉大さというものを刻み込んでおくべきで
あつたか。我がセイバーに寝返り、貴様と敵対すればどうなるかも考えられんとはな
……やはり記憶か？他のサーヴァントとの記憶の影響で、我に関する記憶の優先度が下
がつているとでも？」

やはり消しておくべきか、そんな物騒なつぶやきが耳朶へと届く。

いや別にギルガメッシュとの記憶に齟齬があるわけでもないし、優先度が下がつてい
る訳ではない。実際に最近、というかギルガメッシュが召喚されてからはよく彼と駆け
抜けた日々を思い返すことが多くなっている。

ただ私は、そのセイバーに寝返るギルガメッシュという姿が想像できなかつたに過ぎ
ない。

「……ほう、では貴様は我が寝返るはずがないと？」
寝返るはずがない……ある意味ではそうかもしれない。

ギルガメッシュは相手が気に入らなければ確かに裏切つて相手につくことだつてあるのだろう。

それでも、私が知つてゐる王様は——別の自分が惚れた女のためだけに立場を変えるような王様じやない。何より、

——長い時間を共にしてくれたギルガメッシュが、ぽつと出について行つてしまふとは思えない。

まあどつちがぽつと出なのか分からぬけど。

でも彼はかつての聖杯戦争でサーヴァントに見捨てられた私を、財宝を削つてでも助けてくれた。

その果てにともに勝利を掴み、消されるだけの私をまたもや彼は救つてくれた。

そんなにまで救われて、私が彼を信じられないはずがない。

私が彼を信じたい、うん、これが一番合つてゐる気がする。

まあ飽きられたらそれまでの話ではあるが。

「——ふむ、そうきたか。相も変わらず愚かといふかなんといふか、まあ我的には80点くらいか。ああ、貴様が我に信を置くその様は以前にも一度見てゐる。自分の身が溶かされようと手足がなくならうと、我に元へとたどり着かんとその進む姿を、我

はほんやりと覚えている

そういうとギルガメッシユは愉快そうに笑い、背を向けた。

「うむ、そういうことならば許すぞ白野よ。贋作者やアホ毛、化け狐の悔しそうな顔が目に浮かぶわ……！」

……どうやら他のサーヴァント達でも同じようなことがあつたのは伝えない方がよろしそうである。

もしおんなじことがあつたと伝えてしまつた日には恐ろしい罰ゲームが待つてゐるだろう……あれはひどいものであつた。何故あんなものが宝具にまで昇華されたのか理解できないほどにひどい宝具であつた。一体何人の人が犠牲になればあれ程までの神秘を秘めるようになるのか。

思い出すのもアレなのでやめておこう。

「……英雄王の手綱を握るか。そりやあ勝てないわなア」

キヤスターもまた面白そうに笑つていた。

そりやあギルガメッシユに勝てる英靈なんて数えるほどいるのか、いないのか。

「そういう意味じやね工んだが……まあ嬢ちゃんだからな」

人のよさそうな笑みを浮かべて、キヤスターは離れていつた。

ギルガメッシユはご満悦なので放つておくとして……マシユと所長を労わつておこ

う。

マシユは私のためにと命を懸けてその宝具の力を引き出してくれたのだから。所長も巻き込まれた上に、ちよくちよくやつてくる魑魅魍魎を倒しつつ、私の手助けをしてくれていた。だからこそ戦いの途中、所長に感謝の言葉を口にすれば所長は照れた顔をして、

『べ、別に貴方のためじゃあなくてね!? 少しでも同じ境遇の人がいればこの魑魅どもが私に殺到する数が裂かれるというか……ええ、裂かれてないわね！ 殺到してあぶれたのがソツチに行つてるだけね！ ああもう、それこそ私のせいで死んだなんて御免だからね!!』

そこまで言われては私も全力全開で所長と共に戦うほかなかつた。

あれだね、やっぱりツンデレはきゅんとくるね。

特にあれだけツンツンされてた期間が長かつたからひとしおだね。

カルデアに帰つたら所長の手伝いもできるよう、仕事を覚えることにしておこうと思う。
「あ、先輩。お疲れ様です……それと申し訳ありません。私が宝具を使えないばかりに、
先輩に負担をかけてしまいました」

それこそ気のことじやない。

マシユと私はもう一心同体なのだから、マシユに負担がかかるのならば相応の負担を

私も背負うべきだ。

「ありがとうございます、先輩。先輩が一緒ならば心強いです。……それで、なのですが、えつとですね。どさくさ紛れの発言で先輩の耳に届いていたか分からぬのですが……」

ああ、ご褒美の話か。

「うう、や、やはり聞こえていましたか。いえ、当時の私はそれはもう必死で余裕もなく、咄嗟に口から出てしまった素直な欲望なので聞かなかつたことに——」

私に出来ることならば、可能な限り頑張ろう……あ、聞かなかつたことに？ 分かつた、じやあ聞かなかつたことに——

「——しないでいただけると大変喜ばしいです！」

え、あ、うん？

まあマシユが喜んでくれるというならば私も頑張りがいがあるというものである。
それじやあこの戦いが終わるまでに考えておいてほしい。

そして、全部終わつたらカルデアに帰つて、私にそれを伝えてほしい——キチントマシユの口から。

「はい、必ず。必ず帰りましよう、先輩」

「……なあ所長さんよ。嬢ちゃんのアレは相変わらずか？」

「ええ、恐ろしいほどのプレイボーアもといプレイガールつぶりよ。人に敏感なマシユがコロリといくほどには……最近は私も危ない気がしてならないわ」

「戦歴まとめりやあ、数こそフェルグスに劣るだろうが質なら優に超えてんじやねえか？」

「そこと向こうでキヤスターと所長が話していた。

どうやら仲良くなれたようで一安心である……ケルトにトラウマ持つたら大変な気がするし。

私？ まあ私は理不尽に耐性があるので問題はない——できる限り私からは関わらないようにするけど無駄になるに決まっているのだから。抑止力か何か働いていそうで怖すぎる。何故私の歩む道はいつもこんななんばつかなのか。

それからまたしばらく。

大方のメンバーが回復し、私たちはついに敵の本拠地と思われる洞窟の中へと足を踏

み入れた。

先頭を行くのはキャスターで、彼は迷う様子もなくスイスイと足場の悪さなど気にした様子もなく進んでいく。

「まあ英雄王は知つてゐるだろうが、大聖杯はこの奥にある。元々は聖杯戦争のために用意された場所……地下工房だ。侵入者用のトラップが多いからはぐれないよう注意しな。はぐれさえしなけりやこの程度のトラップ、踊りながらでも解除してやるよ」

ありがたい。

流石はキャスターのサーヴァントと言つたところか。

……ぜひ、この調子でお願いしたい——じゃないとマシユが宝具を使えるようになつた以上、ギルガメッシュが動きかねない。主に誰かを針山にせんとして。

「……最大の敵が俺の後ろを歩いてるとか、一番危ないパターンじやねえか！　おいおい勘弁してくれよ!?」

い、今のところは大丈夫だと思う。

どうもギルガメッシュの機嫌がいいみたいだし、すっかり忘れているのではないだろうか。

ここまで機嫌がいいのは珍しいし、もしかしたらこの先に待つてゐるというセイバーとの対面が楽しみなのではないだろうか。なんだかんだでこの聖杯戦争にセイバーが

参加していると確信しているくらいには、彼女のことを知っているようだし。

「まあそれもあるんだろうがよ……つと、そういうやまだ残つてゐるサーヴァントの情報を伝えてなかつたな」

いや、でもそれ伝えたなら消されない？

「だから小声で、嬢ちゃんにだけ伝えんだろ。ほれ耳を貸せ——いや、やめとくか。ちゃんとこの距離で聞き取つてくれ。じゃねえとせつかく伸びた時間が消し飛んじまうからよ。取りあえず、残つてんのはセイバーにアーチャー、そしてバーサーカーにこの俺だ」

ふとアーチャーと言われて思い浮かべたのは当然ながらあの紅い弓兵だ。

まあそんなことは早々にないとは思うのだが。

「アーチャーは、いけすかねえ野郎でな。アイツの性格とはまず相いれねえ。そんで能力の方だが……これもまた変わつててな、アーチャーのくせに剣を使いやがる。どこにそんな弓兵がいるんだよつて話だが事実でな。おかげで正体がつかめねえ」

……うん、ああ、もしかするともしかするのかもしれない。

とはいひもし居るのだとすれば、それは私の知るアーチャーではないだろう。

割り切れるかは別として、敵として現れるのならば覚悟しておかなければならない。できるかどうかは別として。

「んで残るバーサークーだが、コイツはハツキリしてやがる。尋常じやないバケモノ——なんだがこれまた奇妙でな。セイバーに消されたのか知らねえが足取りがつかめなかつた。だから警戒するのはこの奥にいるだろういけすかねえアーチャーと、堂々構えてるだろうセイバーだ」

そのセイバーだけど、真名はなんというのだろうか。

この前の休憩時間に聞いた限りだと、圧倒的な火力で他のサーヴァントを殲滅したくらいいしか分からなかつた。

「ああ、まあ嬢ちやんなら平氣か。正直、中途半端な奴じやその真名を聞けば腰が引けると思つてよ。だがあの英雄王と一緒にいる嬢ちやんが驚くようなことがあれば、それこそ師匠が召喚された時とかあり得ない場合くらいだろうよ。だから教えてやるよ、アイツの真名とその宝具を——」

もつたいたいぶるその様子に、どんな大物が出てくるのか息をのむ。

「その宝具の名はエクスカリバー。この世でもっとも名の知れた聖剣であり、セイバーはその担い手であるアーサー王だ。まあそのアーサー王、実は女だつたりと色々あるけど省くぜ?」

うん、そこはいいや。

ウチのセイバーとかもそだつたし。

でもそつか、円卓か……円卓かア……嫌な予感しかしない。

「つうか、あんま驚いてねえな？ もうちよつとこう反応があると思うんだけどよ？」
だつてその姉妹剣を知つてゐるし。

その坦い手である太陽の騎士とも戦つたことあるし。

でも驚いてないわけじやないのだ——だつてあの円卓だよ、アレを治めた王様だよ？
——どんな筋肉ダルマさんです？ 精神は正常な人？

「だよなあ、そう思うよなあ……まあ会つて確かめな。見た目はアレだが、腕は間違いな
く超一流の域だ。サーヴァントとしてもな」
ですよね、ガウエイン級だよね。

それがこの先にいるとかクライマックスじやないか。

「まあ安心しな。俺もいるし、認めたくはねえが超一級のサーヴァントが嬢ちゃんにつ
いてんだ。それに俺の見立てじや、あのデミの嬢ちゃんの宝具はセイバーと相性がい
い。嬢ちゃんがいつも通りやれば問題ねえ」

その通りだ。

私が動搖してしまえば、それはマシユにも伝わつてしまふだろう。

やるべきことは一つ、いつも通りに前に進むこと。

——相手が誰だろうと、負けてやるつもりなんて欠片もない。

「——はは、ははは！ 威勢のいい嬢ちゃんだ、ああ、それでこそってなあ！ 畜生、キヤスターとして召喚されたこの身がもどかしいぜ！ よし、行こうぜ嬢ちゃん。この先、あのアーチャーが待ち構えてる。さつさと叩きのめして、終わらせるぞマスター！」

「ちょっと、ケルトに染まってない!?」
思つたより影響を受けやすいというか、だから対応できてるのかしら……」

「……」は一応敵地なのだから、少し声を抑えてはどうかね？」

ドクンと、心臓が鼓動を打つ。

とても聞き覚えのある声、ああ、この声を知つてゐる。

何時だつて前に立ち、その背で私を導いてくれた、心の底から安心できる彼の声だ。
彼はきっと、いや間違いなく――

「——去ね、贋作……ではなく雑種。貴様ならばなんの遠慮もなく消し去れるとい
うものよ……この溜まつた鬱憤をその身で受け止め塵と化せえええええええ！」

「む、英雄王!? 何故貴様がここに! いや、そんなことよりも慢心をどこに置いてきた!
! おまけにそこのマスターと思わしき少女を見たら摩耗した記憶がやけにうずくだ
と! ま、待たんか、こんなところでその宝具を放つてみろ生き埋めになるぞ。分かつた、
通つて構わんからそこのマスターを巻き込むな————!?」

次の瞬間、赤い奔流が視界を覆う。

同時にスッとキヤスターに見ちやいけませんとばかりに目をふさがれた。

「ふん、我が我のものを操れぬとでも? この程度の加減なぞ児戯にも等しい……うむ、
我的輝かんばかりの魂がより一層美しいものとなつた。具体的に言うと八つ当たりで
きてスッキリした」

「な……なんでさ…………」

私がキヤスターの目隠しを解き視界が自由になつたころには、そんな切ない声と共に
金色の粒子が溶けていく瞬間だつた。

——さつき、贋作者言わなかつた?

「言つていなが? 所詮は雑種、我にかかれば一瞬であつたな。称えても良いぞ?」

何だか無性にアーチャーに会いたくなつた。

安否の確認を兼ねて。

十二話

この足は止まらない。

例えこの奥にかの騎士王が鎮座していようと、止まることはない。
だつて私は――

――早く戻つてアーチャーの無事を確認せねば！

「何故でしょうか……そのアーチャーさんがちよつとは傷ついてほしいと思つてしまふのは」

「ははは、デミの嬢ちゃんと嬢ちゃんは見てて飽きねえな！　特に外野から見る分には

……当事者はもう御免だぜ」

どこか遠い目をしてキヤスターは進む。

ハリーハリー、目指せ最奥！

そして召喚ポイントを設置するのだ！

「一応、やるべきことの優先順位を失つてないから何も言わないけど……そういうところは英雄王のこと信用してないのね」

信用してるよ？

彼はやるときは本当にやる王様なのだから。

それが善行だつたり悪行だつたりは本人のさじ加減なのだ。

そしてアーチャーとギルガメッシュの性格を知つている私に言わせてもらえば、まさに水と油。保護者気質のアーチャーに唯我独尊我様ギルガメッシュの組み合わせとか合うはずがない。おまけにアーチャーは贋作を、ギルガメッシュは真作を扱うのだからなおさらだ。

つまり、ギルガメッシュはアーチャーが気に入らないはず。

そして気に入らない奴にたいしてギルガメッシュは容赦しない。

「まあ、あのアーチャーが気に入らねえのは俺も同感だけどよ」

確かに皮肉屋ではあるが、そこも含めてアーチャーだ。

最初こそむつとすることはあれど、彼を知れば知るほどその言葉の裏の本意が分かるようになる。そうなつてしまえば凛と同じようにツンとした言葉の裏に真意が見いだせる。ここまで来てしまえば彼の皮肉は笑つて流せる。

「嬢ちゃんが特殊なんだと思うんだが……もう何も言うまい。取りあえずは安心していいと思うぜ。あの英雄王と言えど、本気で嬢ちゃんを悲しませるようなことはしねえよ。いや、嬢ちゃんだからこそか……」

そう信じたい。

そう思いながら愉快に笑い前を進む金ぴかの背中を見る。

まあギルガメツシユも、あの『アーチャー』じやないと分かつてから開幕ブツパしたんだろうし……少し落ち着こう。

今さらながらこの奥にいるのは、かのガウェインを従えていた英雄なのだ。

「切り替えが早いのはいいことだ。おまけに諦めは悪いし後ろに引かない……何より運もいい。そういうやつこそ星の加護つてのが得られるもんだ」

「すでに受けているではないか。この我が守護してやっているのだ、星の守護と相違あるまい」

「尊大なのに否定できないのが痛いわね。……それで、どうするつもり？　この先にいるのは最も有名な聖剣と担い手。策もなしに突っ込んでどうこうできる相手とは思えないんだけど……」

所長の言うとおりである。

ガウエインだって聖者の数字とかいうチート能力を持つていたのだ、かの騎士王はそ

れ以上の可能性だつてある。

「先輩、その聖者の数字というのは……伝承の？」

太陽出てたら能力が三倍になるの。

「何よ、その壊れ性能は。おまけに聖剣持ちですつて……？」
そのスキルを破らないと掠り傷一つ負わせられないこともあつた。

場合によつてはその聖剣を二連撃つてくる。

その攻撃範囲の広いこと——拡散とかあんまりだ。

加えて、彼のマスターが決着術式「聖剣集う絢爛の城」とかいう、聖剣の一撃でようやく破壊できるだろう高出力の炎壁で囲つてくるのだ。その中で拡散型の聖剣とか本当に地獄だつた。なんで表の聖杯戦争で使用してくるのか……。

きつとギルガメッシュが強すぎたから、レオも本気中の本気になつたのだ。

「よく……よく勝てたわね。いくらサーヴァントが英雄王だからって、その組み合わせはマスター殺しじやない」

流石に死にそうだつたから、魔術をガン積みして耐えきつた。

アトラス使つて赤原使つて、ロールケーキ食べて……。

回復アイテム買い忘れ、挙句の果てに魔力切れの時にふと思ひだしたロールケーキがなかつたら危なかつた。

「まあ我にかかれれば決着がつくのは一瞬であつたがな」
よく言う。

あの炎壁に興味を取られて、強制テレポートで私と離されたくせに。かといって私が外からギルガメッシュを中に引き入れようとしても炎壁に遮られるのだ。向こうはいいけど私はダメとか本当に絶望的だつた。

そして対魔力はどこへいったのか。

「あの程度の距離、あつてないようなものだ。事実、お前に傷一つつけさせなかつただろう」

実際はいきなり赤い奔流が炎壁ごとガウエイン削り取つたんだけど。

右上半身を削られ、靈格が破壊されながらも最後にレオの元へと戻つたガウエインはまさに騎士の鏡だつた。

「……む？ 何やら我より、アヤツの方が評価が高いような？」

気のせい氣のせい。

そんなことよりも先に進もう。何気に禍々しい気配が近づいてきてる気がする。

ただなんというのだろうか、今まで私が相対してきた『悪』に属する英雄たちとは何かが違う。

気が狂つてゐるかのような寒氣も、背筋を凍らせるような殺意も、圧倒的な暴力にも

感じ取れるその存在感も感じ取れない。ただ何かがそこにある。厳かで、波のたたない静かな水面のような魔力の塊がそこにある。

初めての経験だったのかもしれない——敵として相対しているのに、ここまで落ち着いてしまっているのは。

——いや、敵として私が認識できていないのか。

口にしてみて、ストンと胸に落ちる。

しかし同時に、何故という疑問が浮かび上がるが……ギルガメツシユの笑い声にかき消される。

「どうやら此度の戦い、予想以上の収穫が得られそうではないか。流石は我が見込んだセイバーよ。いいか白野、今回は許すが次は許さん。ソレを次に向けるのは——他の誰でもないこの我と心得よ」

そういうと彼は先ほど以上に愉快愉快と歩き出す。

もうなんというか流石というか、彼は私が抱いた疑問の答えを理解してしまつたらし

い。

こういう場面を見ると、本当に彼は偉大な偉人の一人であるのだと再認識できる。

普段はただの我様だけだ。

「おい嬢ちゃん、考え方もかまわねえが到着するぞ——ほれ、あれが大聖杯つてやつ

だ」

キヤスターの声で我を取り戻し、視線を前に向ければそこは大空洞の入り口だつた。そしてその正面にある巨大な物体——何と表現するべきなのか分からぬソレは、表現こそできないがあれこそが聖杯なのだと理解できる代物だつた。私の知つてゐる聖杯——ムーンセルとはまた別の神秘の塊。

「もう驚かないとは思つてたけど、何よこれ。超抜級の魔術炉心じやない……なんでこんなどこに置いてあるのよ……」

所長の隣ではマシユも愕然としている。

ぽかんとした表情は可愛らしいが、それを眺めていられるほど余裕はないらしい。

ガシャリと金属のぶつかる音がした。

経験上、それは鎧の音であると知つてゐる。
——來た。

「　　」
一目で、その存在に魅入られた。

言葉を発さず佇むその姿に、私の目は釘づけにされていた。美しい金色の髪、白い肌、華奢な体、人間とは思えないような美しさ。それを飲み込むがごとく溢れ出る王者の風格。身にまとう魔力は可視化され、黒となつて彼女の周りに浮遊する。

太陽の騎士たるガウエインとは真逆の月を思い浮かべてしまう。静かに全てを見下ろし包み込む王。

彼女の瞳を目が重なり——『王』という存在を知つた。
ギルガメツシユとも違う、セイバーとも違う、初めて出会う新しい王様。
しかし、

——でも、なんかうちのセイバーとそつくりなんですけどー！

「女だとソツチに驚くんじやないのが貴方よね、知つてた」

そんな驚きで全部吹っ飛んだ。

いやだつてあれそつくりさんとかいうレベルじやないんですけど。

パートとかほぼ一緒だよね？ 目の色違うくらいじやない？

あ、でもスリーサイズが違うのか……？ 赤王はB83・W56・H82だったはず。

何で知つてるかつて？ 言わせるなよ恥ずかしい。

ちなみに正面にいるアーサー王より間違いなく胸は大きかつた。

「——面白いサーヴァントがいると思えば、何だ貴様は。いきなり喧嘩を売られるとは思わなかつたが——買つてやろう」

あ、地雷だつた。

というか思つてたより物騒な人だつた！

誰だ波立たない水面とか言つたのは……！

「つうか喋れたのか、アイツ……」

「いえ、流石に今のは先輩が……」

「ふはははは！ 流石のアヤツも貴様には言われたくは無からうよ！ 貧相さはいい勝

負なのではないか……？」

よし、言つたな、言つちやつたな——戦争だ。

私は貧相というのではない、スレンダーだ！

「その通りだ。別に私が貧相であることを認めるわけではないが——む、まさか貴様、その忌々しい黄金は……」

先ほどまで私に殺氣を向けていたセイバーのソレが全てギルガメツシユに移る。

もしかしてわざと殺氣を逸らすために、なんて考えもしたがそれはないと愉悦を浮かべるギルガメツシユを見て考え至る。

「英雄王……忌々しい貴様が何故ここに。一度この聖剣の餌食となつたはずだが……」

?

どうやらこの聖杯戦争に別のギルガメッシュもいたらしい。

そして不意打ちを食らつて聖剣の光に飲み込まれたと。

「いえ、正面から戦つた可能性も……」

正面から戦つたのなら、ギルガメッシュに敗北はない。

彼の蔵の中には、聖剣の光すら切り裂くあの宝具だつてある。そんなギルガメッシュが敗北するのだとすれば、戦闘中に横から宝具を撃たれるなどという意識外からの攻撃くらいだろう。彼の認識外からの聖剣による一撃ならば、自動防御の宝具が稼働していたとしてもそれごと飲み干せるだろう。

「先輩は、英雄王を本当に信頼しているんですね」

何だかんだ言つて長い付き合いだ。

そして多くの修羅場を潜り抜けていたパートナーでもある。

彼の性格こそああではあるが、惹かれるところはとても多い。

——あんなふうに生きられたなら、なんて思ったことだつてある。

勿論、ただの血の迷いである。

あんな風に生きられるのは彼だけの特権であり、そもそも私は彼のように世界を背負えない。

だからこうして彼を眺めているのは、実は結構楽しかつたりするのだ。

「嬢ちゃん……変わつてるとは思つたがそこまでか！　懐が広いというか広すぎて際限ないというか……時代さえ違えばコツチに来てるんじやねえか？」

キヤスターの言葉に同意するように、所長がうなずきため息をはく。

そして彼女は私を見ながら真剣な表情で言う。

「何にせよ、貴方、今のは英雄王に言わないこと。とんでもないことになるわよ？」

同時に、私以外の皆がうなずいた。

当然私も先ほどの話をギルガメッシュ本人に話すつもりはない。

最悪、針山にされかねないし。

——と、こんな話をしている暇はない。

視線をギルガメッシュとアーサー王に戻す。

しかしそこには予想外ともいえる光景が写つていた。

ギルガメッシュが私を見て笑い——アーサー王が私の方へと歩いてきていた。

「……ちよつと、ねえちよつと。どういうこと」

「申し訳ありません所長、流石に私も状況が読み込めず……ですが、アーサー王から敵意は感じません」

マシユ、そしてキヤスターはいぶかしみながらも動けるようにと武器を構える。

私はこつそり回路を起動しておき、不意打ちに耐えられるよう魔術をピックアツプ、待機させておく。そんな私を見ながらアーサー王は感心するよううなずき——地面を蹴った。いや、蹴ったという表現は適切ではない。彼女が立っていた地面は、彼女を中心いてクレーターができていた。

早い、速い、そんな次元のものではなかつた。

「先輩、逃げ——ぐうつ!?

「ち、あの金ピカは何考えてやがるツ」

その一瞬で彼女は私たちの懷に踏み込み、そして聖剣を一閃していた。

流石、サーヴァントであるマシユとキヤスターは何とかその一撃を凌いでいたが大きく吹き飛ばされてしまう。

——所長! move | speed ○!

アーサー王の速度に対し、強化したところで意味なんてないかもしれない。

それでもほんの少しでもプラスになるのならば良し。

光の骨子が足を包み、所長を回収して下がる

——判断は早かつたが、この危機に際しその女も救おうとするか。傲慢だな

ことは出来なかつた。

彼女は静かに、私と所長の間に立つていた。

「理解はしているはずだ。この場において、貴様が死ねばすべてが終わる。何があろうと貴様一人は生き残らればならないと」

驚きはしない、これが英靈だ。

凛のランサーなんてもつと早かつたかもしれない。

更に待機させておいた魔術を起動させる。

「わ、わわ私の事なんて放つていきなさい！　貴方が死ねば必然的に私たちも死ぬんだからっ！」

そんな声が耳に届く。

精一杯の虚勢、それが何よりも温かい。

怖いのに、死にたくないのに、大人だからと気丈に立つその姿が眩しく映る。

そんな所長が好ましい。

——でも、あんな思いはもうごめんだ。

白い骨子で出来た小刀。

それは魔力放出を持たないサーヴァントにその効果を付与する魔術。

しかしその対象は、別に自分でもいい。

素人の適当な一振り——当たらないと理解している。

だから、一撃に全部込めて私の正面全部ぶつた斬る。

「神代ならばいざ知らず、現代の魔術師の一撃が対魔力を越えられるはずが——む
!?」

そう、越えられないはずなのである。

こちらの世界の知識では。だが、月では違うのだ。

対魔力があるうと——ダメージはともかく状態異常は叩き込む。
——確かにダメージは通らないけど、『スタン』なら入る。ガウエインでも経験済みだ。

「貴様、最初から時間稼ぎが目的で……恐れしらずか？」

別に怖いものがないわけじゃない。

ただ私は近しい誰かが消えてしまうのが、人一倍怖いだけだ。

私に多くは救えない、だから手の届く人たちだけは全力で守りたい。三流の魔術師である私に出来ることなんて限られすぎていて泣けてくるけど、何もしないよりはマシだと信じてきたのだ。

一人では無理だが、二人なら話は変わる。

私一人でサーヴァントには勝てないが、マシユとならば勝てるかもしね。

月だって、生徒会の仲間がいたからこそ、あの場までたどり着くことができた。負けるその時まで、命断たれるその時まで、私は勝つつもりで立ち続ける。

そこの黄金の王との旅路に恥じぬように、これまでで得た仲間との旅路を汚さぬよう
に。

——例え相手が神であろうと、そう簡単に私を折れるなんて思うなよ。

この状況でアーサー王に啖呵きるとか馬鹿じやないの!?

そんな声を聞きながらも、アーサー王は動かない。

駆け付けるマシユ達を見て、彼女は静かに笑みを浮かべていた。